Form No. 3363-319 Rev C

TORO®

Count on it.

オペレーターズマニュアル

Reelmaster® 3100-D トラクションユニット

モデル番号03170—シリアル番号 310000001 以上

モデル番号03171—シリアル番号 310000001 以上

モデル番号03172

モデル番号03173

製品のご登録、オペレーターズマニュアルやパーツカタログの無料ダウンロードはこちらへどうぞ：www.Toro.com.

この文書は翻訳です。（JA）

はじめに

この製品は、関連するEU規制に適合しています； 詳細については、DOC シート（規格適合証明書）をご覧ください。

警告

カリフォルニア州
第65号決議による警告

カリフォルニア州では、ディーゼル・エンジンの排気ガスやその成分には発癌性や先天性異常の原因となる物質が含まれているとされております。

この機械は回転刃を使用するリール式乗用芝刈り機であり、そのような業務に従事するプロのオペレータが運転操作することを前提として製造されています。この製品は、集約的で高度な管理を受けているゴルフ場やスポーツ・フィールド、商用目的で使用される芝生に対する刈り込み管理を行うことを主たる目的として製造されております。本機は、雑草地や道路わきの草刈り、農業用地における刈り取りなどを目的とした機械ではありません。

この説明書を読んで製品の運転方法や整備方法を十分に理解し、他人に迷惑の掛からないまた適切な方法でご使用ください。この製品を適切かつ安全に使用するのはお客様の責任です。

弊社Toroのウェブサイトwww.Toro.comで製品・アクセサリ情報の閲覧、代理店についての情報閲覧、お買い上げ製品の登録などを行っていただくことができます。

整備について、またToro 純正部品についてなど、分からないことはお気軽に弊社代理店またはToro カスタマーサービスにおたずねください。お問い合わせの際には、必ず製品のモデル番号とシリアル番号をお知らせください。図 1にモデル番号とシリアル番号を刻印した銘板の取り付け位置を示します。いまのうちに番号をメモしておきましょう。

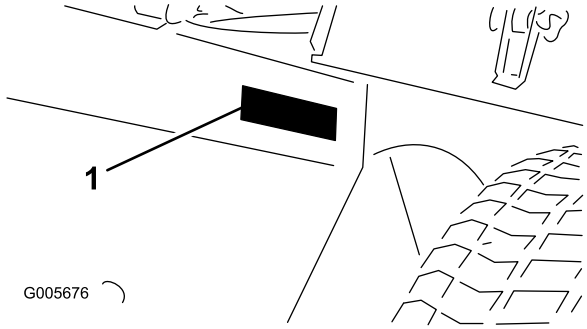


図 1

1. 銘板取り付け位置

モデル番号_____

シリアル番号 _____

この説明書では、危険についての注意を促すための警告記号図 2を使用しております。死亡事故を含む重大な人身事故を防止するための注意ですから必ずお守りください。

図 2

1. 危険警告記号

この他に2つの言葉で注意を促しています。**重要**「重要」は製品の構造などについての注意点を、**注**はその他の注意点を表しています。

重要 このエンジンにはスパーク・アレスタが装着されていません。カリフォルニア州の森林地帯・潅木地帯・草地などでこの機械を使用する場合には、法令によりスパーク・アレスタの装着が義務づけられています。他の国や地域においても、法令によりスパーク・アレスタの装着が義務づけられている場合があります。

© 2012—The Toro® Company
8111 Lyndale Avenue South
Bloomington, MN 55420

連絡先： www.Toro.com.
Printed in the USA
禁無断転載

目次

はじめに 2
安全について 4
安全な運転のために 4
安全にお使いいただくために：Toro からのお願い 6
音力レベル 8
音圧レベル 8
振動レベル 8
安全ラベルと指示ラベル 9
組み立て 13
1 車輪を取り付ける 14
2 ハンドルを取り付ける 14
3 バッテリーを充電し機体に取り付ける 15
4 傾斜計を点検する 16
5 フード･ラッチを取り付ける（CE 規格） 16
6 排気管ガードを取り付ける（CE 規格） 18
7 ROPSを取り付ける 18
8 前昇降アームを取り付ける 19
9 カッティングユニットにキャリア・フレームを取り付ける 20
10 カッティングユニットを取り付ける 21
11 リール・モータを取り付ける 22
12 昇降アームを調整する 23
製品の概要 25
各部の名称と操作 25
仕様 27
アタッチメントやアクセサリ 27
運転操作 28
エンジンオイルの量を点検する 28
燃料を補給する 28
冷却系統を点検する 29
油圧システムを点検する 30
タイヤ空気圧を点検する 31
リールとベッドナイフの摺り合わせを点検する 31
ホイールナットのトルク締め 31
エンジンの始動と停止 31
燃料系統からのエア抜き 32
インタロック･システムを点検する 32
緊急時の牽引について 33
スタンダード・コントロール・モジュール(SCM) 33
ヒント 36
保守 41
推奨される定期整備作業 41
始業点検表 42
定期整備ステッカー 43
整備前に行う作業 43
フードの外しかた 43
潤滑 44
ベアリングとブッシュのグリスアップ 44
シールド･ベアリング 46
エンジンの整備 47
エア・クリーナの整備 47
エンジンオイルとフィルタの交換 48
燃料系統の整備 49
燃料タンクの整備 49
燃料ラインとその接続の点検 49
燃料・水セパレータの水抜き 49
燃料フィルタのキャニスタの交換 49
インジェクタからのエア抜き 49
電気系統の整備 50
バッテリーの手入れ 50
バッテリーの保管 51
ヒューズ 51
走行系統の整備 51
走行ドライブのニュートラル調整 51
冷却系統の整備 52
エンジンの冷却系統の清掃 52
ブレーキの整備 53
駐車ブレーキの調整 53
ベルトの整備 53
エンジンベルトの整備 53
制御系統の整備 54
スロットルの調整 54
油圧系統の整備 55
油圧オイルの交換 55
油圧オイルフィルタの交換 55
油圧ラインとホースの点検 56
その他の保守整備 56
カッティングユニットのバックラップ 56
保管 57
冬期格納保管のための準備 57
図面 59

安全について

この製品は本書掲載のとおりにウェイトを搭載すること により、製造時の状態においてCEN 規格EN 836 : 1997（但し所定のステッカーの貼付が条件）、および米国連邦ANSI B71.4-2004規格による乗用芝刈機の安全基 準を満たす製品です。

不適切な使い方をしたり手入れを怠ったりすると、人身事故につながります。事故を防止するため、以下に示す安全上の注意や安全注意標識のついている遵守事項は必ずお守りください。これは「注意」、「警告」、「危険」など、人身の安全に関わる注意事項を示しています。これらの注意を怠ると死亡事故などの重大な人身事故が発生することがあります。

安全な運転のために

以下の注意事項はCEN規格EN 836:1997、ISO規格5395:1990 およびANSI規格B71.4-2004から抜粋したものです。

トレーニング

- この*オペレーターズマニュアル*や関連する機器のマニュアルをよくお読みください。各部の操作方法や本機の正しい使用方法に十分慣れておきましょう。
- オペレータが日本語を読めない場合には、オーナー の責任において、このオペレーターズ･マニュアル の内容を十分に説明してください。
- 子供や正しい運転知識のない方には機械を操作させないでください。地域によっては機械のオペレータに年齢制限を設けていることがありますのでご注意ください。
- 周囲にペットや人、特に子供がいる所では絶対に作業をしないでください。
- 人身事故や器物損壊などについてはオペレータやユーザーが責任を負うものであることを忘れないでください。
- 人を乗せないでください。
- 本機を運転する人、整備する人すべてに適切なトレーニングを行ってください。トレーニングはオーナーの責任です。特に以下に挙げる点についての確実な理解が必要です：
  - 乗用芝刈り機を取り扱う上での基本的な注意点と注意の集中；
  - 斜面で機体が滑り始めるとブレーキで制御することは非常に難しくなること；斜面で制御不能となるおもな原因として：
    - ◊ タイヤグリップの不足；
    - ◊ 速度の出しすぎ；
    - ◊ ブレーキの不足；
    - ◊ 機種選定の不適当；
    - ◊ 地表条件、特に傾斜角度を正しく把握していなかった
    - ◊ ヒッチの取り付けや積荷の重量分配の不適切。

運転の前に

- 作業には頑丈な靴と長ズボン、および聴覚保護具を着用してください。長い髪、だぶついた衣服、装飾品などは可動部に巻き込まれる危険があります。また、裸足やサンダルで機械を運転しないでください。
- 機械にはね飛ばされて危険なものが落ちていないか、作業場所をよく確認しましょう。
- **警告**：燃料は引火性が極めて高い。以下の注意を必ず守ってください。
  - 燃料は専用の容器に保管する。
  - 給油は必ず屋外で行い、給油中は禁煙を厳守する。
  - 給油はエンジンを掛ける前に行う。エンジンの運転中やエンジンが熱い間に燃料タンクのふたを開けたり給油したりしない。
  - 燃料がこぼれたらエンジンを掛けない。機械を別の場所に動かし、気化した燃料ガスが十分に拡散するまで引火の原因となるものを近づけない。
  - 燃料タンクは必ず元通りに戻し、フタはしっかり締める。
- マフラーが破損したら必ず交換してください。
- 作業場所を良く観察し、安全かつ適切に作業するにはどのようなアクセサリやアタッチメントが必要かを判断してください。メーカーが認めた以外のアクセサリやアタッチメントを使用しないでください。
- オペレータコントロールやインタロックスイッチなどの安全装置が正しく機能しているか、また安全カバーなどが外れたり壊れたりしていないか点検してください。これらが正しく機能しない時には芝刈り作業を行わないでください。

運転操作

- 有毒な一酸化炭素ガスが溜まるような閉め切った場所ではエンジンを運転しないでください。

- 作業は日中または十分な照明のもとで行ってください。
- エンジンを掛ける前には、アタッチメントのクラッチをすべて外し、ギアシフトをニュートラルにし、駐車ブレーキを掛けてください。エンジンは、必ず運転席に座って始動してください。運転するときは必ず ROPS を取り付けた上で シートベルトを着用すること。
- 「安全な斜面」はあり得ません。芝生の斜面での作業には特に注意が必要です。転倒を防ぐために以下の注意を厳守すること：
  - 斜面では急停止急発進しない。
  - 斜面の走行や小さな旋回は低速で。
  - 隆起や穴、隠れた障害物がないか常に注意する。
  - 斜面を横切りながらの作業は、そのような作業のために設計された芝刈機以外では絶対行わない。
- 隠れて見えない穴や障害物に常に警戒を怠らないようにしましょう。
- 道路付近で作業するときや道路を横断するときは通行に注意しましょう。
- 移動走行を行うときはリールの回転を止めてください。
- アタッチメントを使用するときは、排出方向に気を付け、人に向けないようにしてください。また作業中は機械に人を近づけないでください。
- ガードが破損したり、正しく取り付けられていない状態のままで運転しないでください。インタロック装置は絶対に取り外さないこと、また、正しく調整してお使いください。
- エンジンのガバナの設定を変えたり、エンジンの回転数を上げすぎたりしないでください。規定以上の速度でエンジンを運転すると人身事故が起こる恐れが大きくなります。
- 運転位置を離れる前に以下の注意を厳守すること：
  - 平坦な場所に停止する。
  - PTOの接続を解除し、アタッチメントを下降させる。
  - ギアシフトをニュートラルに入れ、駐車ブレーキを掛ける。
  - エンジンを止め、キーを抜き取る。
- 以下のような状況になった場合には、アタッチメントの駆動を停止し、エンジンを止め、キーを抜き取ってください：
  - 燃料を補給する前
  - 集草バスケットを取り外すとき
  - 刈り高を変更するとき。ただし運転位置から遠隔操作で刈り高を変更できる時にはこの限りでありません。
  - 詰まりを取り除くとき。
  - 機械の点検・清掃・整備作業などを行うとき。
  - 異物をはね飛ばしたときや機体に異常な振動を感じたとき（直ちに点検してください）。機械に損傷がないか点検し、必要があれば修理を行ってください。点検修理が終わるまでは作業を再開しないでください。
- 移動走行中や作業を休んでいるときはアタッチメントの駆動を止めてください。
- エンジンを停止する時にはスロットルを下げておいて下さい。また、燃料バルブの付いている機種では燃料バルブを閉じてください。
- カッティングユニットに手足を近づけないでください。
- バックするときには、足元と後方の安全に十分な注意を払ってください。
- 旋回するときや道路や歩道を横切るときなどは、減速し周囲に十分な注意を払ってください。刈り込み中以外はブレードの回転を止めておいてください。
- アルコールや薬物を摂取した状態での運転は避けてください。
- 機械が落雷を受けると最悪の場合死亡事故となります。稲光が見えたり雷が聞こえるような場合には機械を運転しないで安全な場所に避難してください。
- トレーラやトラックに芝刈り機を積み降ろすときには安全に十分注意してください。
- 公道を通行することが法律で認められている場合には右左折や停止時に法律で定められている信号灯などを確実に操作してください。
- 見通しの悪い曲がり角や、茂み、立ち木などの障害物の近くでは安全に十分注意してください。

保守整備と格納保管

- 常に機械全体の安全を心掛け、また、ボルト、ナット、ネジ類が十分に締まっているかを確認してください。
- 火花や裸火を使用する屋内で本機を保管する場合は、必ず燃料タンクを空にし、火元から十分離してください。
- 閉めきった場所に本機を保管する場合は、エンジンが十分冷えていることを確認してください。

- 火災防止のため、エンジンやサイレンサ/マフラー、バッテリー搭載部、燃料タンクの周囲、カッティングユニット駆動部の周囲、および駆動部分に、余分なグリス、草や木の葉、ホコリなどが溜まらないようご注意ください。オイルや燃料がこぼれた場合はふきとってください。
- 各部品、特に油圧関連部が良好な状態にあるか点検を怠らないでください。磨耗したり破損したりしている部品やステッカー類は安全のために交換してください。
- 燃料タンクの清掃などが必要になった場合は屋外で作業を行ってください。
- 機械の調整中に指などを挟まれないように十分注意してください。
- 複数のリールを持つ機械では、１つのリールを回転させると他のリールも回転する場合がありますから注意してください。
- 整備・調整作業の前には、必ず機械を停止し、カッティングユニットを下げ、駐車ブレーキを掛け、エンジンを停止し、キーを抜いてください。また、必ず機械各部の動きが完全に停止したのを確認してから作業に掛かってください。
- 火災防止のため、カッティングユニットや駆動部、マフラーの周囲に、草や木の葉、ホコリなどが溜まらないようご注意ください。オイルや燃料がこぼれた場合はふきとってください。
- 格納中や搬送中は、燃料バルブを閉じてください。裸火の近くに燃料を保管しないでください。
- 平らな場所に停車してください。
- 適切な訓練を受けていない人には絶対に機械の整備をさせないでください。
- 必要に応じ、ジャッキなどを利用して機体を確実に支えてください。
- 機器類を取り外すとき、スプリングなどの力が掛かっている場合があります。取り外しには十分注意してください。
- 修理作業に掛かる前にバッテリーの接続を外してください。バッテリーの接続を外すときにはマイナスケーブルを先に外し、次にプラスケーブルを外してください。取り付けるときにはプラスケーブルから接続します。
- リールの点検を行うときには安全に十分注意してください。必ず手袋を着用してください。
- 可動部に手足を近づけないよう注意してください。エンジンを駆動させたままで調整を行うのは可能な限り避けてください。
- バッテリーの充電は、火花や火気のない換気の良い場所で行ってください。バッテリーと充電器の接続 や切り離しを行うときは、充電器をコンセントから抜いておいてください。また、安全な服装を心がけ、 工具は確実に絶縁されたものを使ってください。

安全にお使いいただくために：Toro からのお願い

以下の注意事項はCEN、ISO、ANSI規格には含まれていませんが、Toroの芝刈り機を安全に使用していただくために必ずお守りいただきたい事項です。

この機械は手足を切断したり物をはね飛ばしたりする能力があります。重傷事故や死亡事故を防ぐため、注意事項を厳守してください。

この機械は本来の目的から外れた使用をするとユーザーや周囲の人間に危険な場合があります。

⚠ 警告

エンジンの排気ガスには致死性の有毒物質である一 酸化炭素が含まれている。屋内や締め切った場所ではエンジンを運転しないこと。

運転の前に

特殊な場所（例えば斜面）のための作業手順や安全確認規則をきちんと作成し、全員がそれを守って作業を行うよう徹底してください。**本機で芝刈り作業を行う場所すべてについて斜面の危険度調査を行ってください。** この調査は、常識を十分に活かし、また、色々な芝状態や転倒の危険を考慮に入れてください。また機械に付属している携帯斜面計を使って斜面の角度を客観的に把握すること。調査の方法などについてはこのマニュアルの「運転」の章で解説しています。**機械を使用することのできる最大斜度については、傾斜計の近くに貼り付けてあるステッカーに表示してあります。**

トレーニング

斜面での運転操作に十分に慣れていることが必要です。斜面での注意不足は転倒につながりやすく、人身事故などの大きな事故になります。

運転操作

- エンジンの緊急停止方法に慣れておきましょう。
- テニスシューズやスニーカーでの作業は避けてください。
- 安全靴と長ズボンの着用をおすすめします。地域によってはこれらの着用が義務付けられていますのでご注意ください。
- 機械の可動部や排出口に手足を近づけないでください。
- 給油は燃料タンクの首の根元から12㎜ 程度下までとしてください。入れすぎないこと。
- インタロックスイッチは使用前に必ず点検してください。スイッチの故障を発見したら必ず修理してから使用してください。
- エンジンを始動する前に、駐車ブレーキが確実にかかっていること、走行ペダルがニュートラルになっていること、ブレードの回転が解除にセットされていることを確認してください。エンジンが始動したら駐車ブレーキを解放し、ペダルから足を離してください。走行ペダルを踏み込まないのに本機が走り出す場合は調整が必要です。動き出す場合には、このマニュアルの「保守」の項を参照して調整を行ってください。
- 急斜面以外にも、サンドバンカーや池、溝、小川、などの近くでは特に注意が必要です。
- 小さな旋回をする時や斜面での旋回時は必ず減速すること。
- 斜面では旋回しないでください。
- 斜面でエンストしたり、坂を登りきれなくなったりした時は、絶対にUターンしないでください。必ずバックで、ゆっくりと下がって下さい。
- 急斜面での作業は避けてください。走行できても転倒する危険があります。
- **Model 03171** 転倒が起きる角度は様々な要素に支配され、一定ではありません。芝草の状態や斜面の凹凸の状態、速度（特に旋回中の速度）、カッティングユニットの位置（特にサイドワインダー装着機）、タイヤ空気圧、オペレータの経験など多くの要素が複雑に絡み合って条件が形成されます。一般に傾斜角度15°以下では転倒の恐れは少ないといわれます。20°程度で転倒の恐れは中程度となります。**この機械は傾斜角度20°以内の斜面で使うようにしてください。これ以上の角度では転倒人身事故の恐れが極めて大きくなります。**
- **Model 03170** 転倒が起きる角度は様々な要素に支配され、一定ではありません。芝草の状態や地表面の凹凸の状態、速度（特に旋回中の速度）、カッティングユニットの位置、タイヤ空気圧、オペレータの経験など多くの要素が複雑に絡み合って条件が形成されます。一般に傾斜角度20°以下では転倒の恐れは少ないといわれます。25°程度で転倒の恐れは中程度となります。**これ以上の角度では転倒人身事故の恐れが極めて大きくなります。この機械は傾斜角度25°以内の斜面でお使いください。**
- 下り坂ではハンドリングを安定させるためにカッティングユニットを下げてください。
- 急停止や急発進をしないでください。
- 後退ペダルをブレーキとして使用してください。
- 道路付近で作業するときや道路を横断するときは通行に注意しましょう。常に道を譲る心掛けを。
- 移動走行時にはカッティングユニットを上昇させてください。
- エンジン回転中や停止直後は、エンジン本体、マフラー、排気管、油圧オイル･タンクなどに触れると火傷の危険がありますから手を触れないでください。
- この機械公道の走行を前提とした車両ではなく、いわゆる「低速走行車両」に分類されます。公道を横切ったり、公道上を走行しなければならない場合は、必ず法令を遵守し、必要な灯火類、低速走行車両の表示、リフレクタなどを装備してください。
- 作業中の安全を確保するため、カッティングユニットやサッチャーには、必ず集草バスケットを取り付けてください。また、溜まった刈りカスを捨てる時は必ずエンジンを停止させてください。
- 人や動物が突然目の前に現れたら、**直ちにリール停止**。注意力の分散、アップダウン、カッティングユニットから飛びだす異物など思わぬ危険があります。周囲に人がいなくなるまでは作業を再開しないこと。

保守整備と格納保管

- 整備・調整作業の前には、必ずエンジンを停止し、キーを抜いてください。
- 常に車両全体の安全を心掛けてください。また、ボルト、ナット、ネジ類が十分に締まっているかを確認してください。

- 油圧系統のラインコネクタは頻繁に点検してください。油圧を掛ける前に、油圧ラインの接続やホースの状態を確認してください。
- 油圧のピンホールリークやノズルからは作動油が高圧で噴出していますから、手などを近づけないでください。リークの点検には新聞紙やボール紙を使い、絶対に手を直接差し入れたりしないでください。高圧で噴出する作動油は皮膚を貫通し、身体に重大な損傷を引き起こします。万一、油圧オイルが体内に入った場合には、この種の労働災害に経験のある施設で数時間以内に外科手術を受けないと壊疽を起こします。
- 燃料ラインにゆるみや磨耗がないか定期的に点検してください。必要に応じて締め付けや修理交換してください。
- 油圧系統の整備作業を行う時は、必ずエンジンを停止し、カッティングユニットを下降させてシステム内部の圧力を完全に解放してください。
- エンジンを回転させながら調整を行わなければならない時は、手足や頭や衣服をカッティングユニットや可動部に近づけないように十分ご注意ください。また、無用の人間を近づけないようにしてください。
- ガバナの設定を変えてエンジンの回転数を上げないでください。Toro 正規代理店でタコメータによるエンジン回転数検査を受け、安全性と精度を確認しておきましょう。
- エンジンオイルを点検・補給する際には、必ずエンジンを停止してください。
- 大がかりな修理が必要になった時、補助が必要な時には Toro 正規代理店にご相談ください。
- いつも最高の性能と安全性を確保するために、必ず Toro の純正部品をご使用ください。他社の部品やアクセサリを御使用になると危険な場合があり、製品保証を受けられなくなる場合がありますのでおやめください。

音力レベル

この機械は、音力レベルが 96 dBA であることが確認されています； ただしこの数値には不確定値（K）1 dBA が含まれています。

音力レベルの確認は、ISO 11094 に定める手順に則って実施されています。

音圧レベル

この機械は、オペレータの耳の位置における音圧レベルが 82 dBA であることが確認されています； ただしこの数値には不確定値（K）1 dBA が含まれています。

音圧レベルの確認は、EC規則 836 に定める手順に則って実施されています。

振動レベル

腕および手

右手の振動レベルの実測値 = 0.41 m/s^2

左手の振動レベルの実測値 = 0.52 m/s^2

不確定値（K） = 0.5 m/s^2

実測は、EC規則 836 に定める手順に則って実施されています。

全身

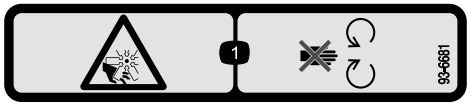
振動レベルの実測値 = 0.49 m/s^2

不確定値（K） = 0.5 m/s^2

実測は、EC規則 836 に定める手順に則って実施されています。

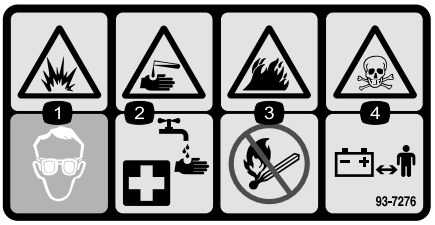
安全ラベルと指示ラベル

危険な部分の近くには、見やすい位置に安全ラベルや指示ラベルを貼付しています。破損したりはがれたりした場合は新しいラベルを貼付してください。



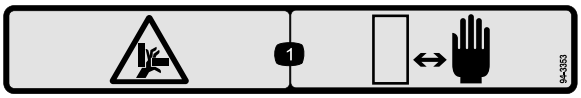
93-6681

1. 手足の切断の危険 – ファン；可動部に近づかないこと。



93-7276

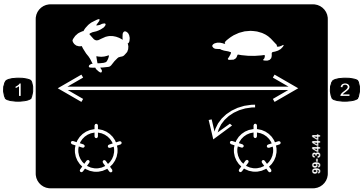
1. 爆発危険：保護メガネを着用すること。
2. 劇薬危険：皮膚に付いたら真水で洗ってから救急手当て。
3. 火災の危険：火気厳禁・禁煙厳守のこと。
4. 毒物危険：子供を近づけないこと。



94-3353

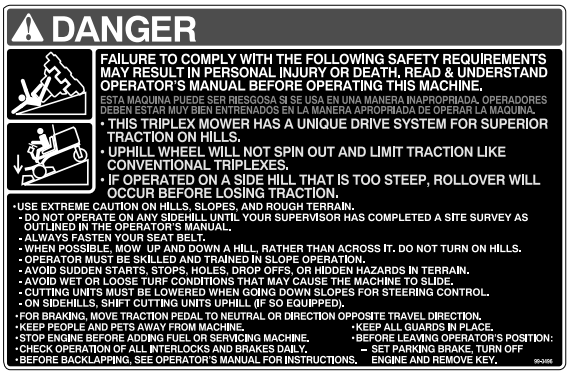
モデル 03207 のみ

1. 手を押しつぶされる危険： 手を近づけないこと。

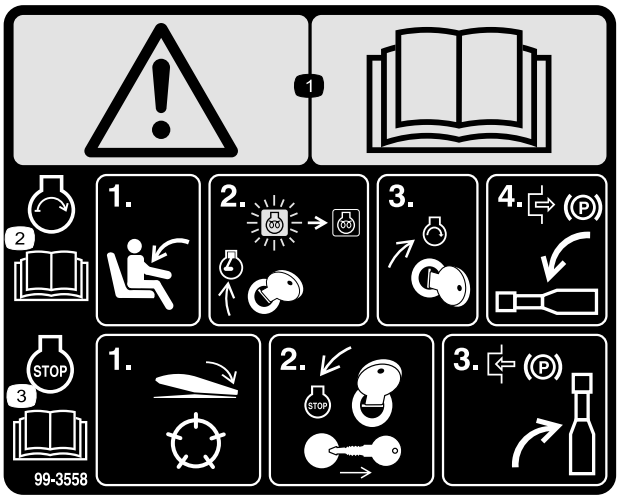


99-3444

1. リール速度：高速
2. リール速度：低速



99-3496

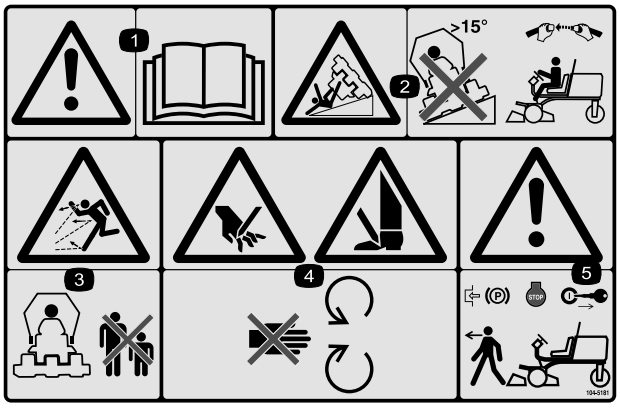


99-3558

（CE用）

1. 警告：*オペレーターズマニュアル*を読むこと。
2. エンジン始動要領：着席；キーをON/Preheat に回してグロー表示が消えるのを待つ。キーをSTART 位置に回す；駐車ブレーキを解除する。詳細は*オペレーターズマニュアル*を参照。
3. エンジン停止要領：カッティングユニットを解除；キーをOFF に回す；キーを抜き取る。駐車ブレーキを掛ける。詳細は*オペレーターズマニュアル*を参照。

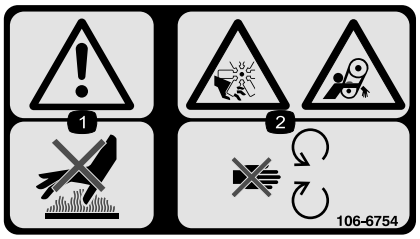
100-4837



104-5181

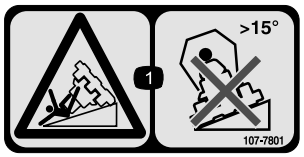
（CE用）

1. 警告：*オペレーターズマニュアル*を読むこと。
2. 転倒の危険：15° 以上の斜面では運転禁止。転倒保護バー装着車ではシートベルト着用すること。
3. 異物が飛び出す危険：人を近づけないこと。
4. 手足や指の切断の危険： 可動部に近づかないこと。
5. 警告： 車両を離れるときは駐車ブレーキをロックし、エンジンを停止し、キーを抜くこと。



106-6754

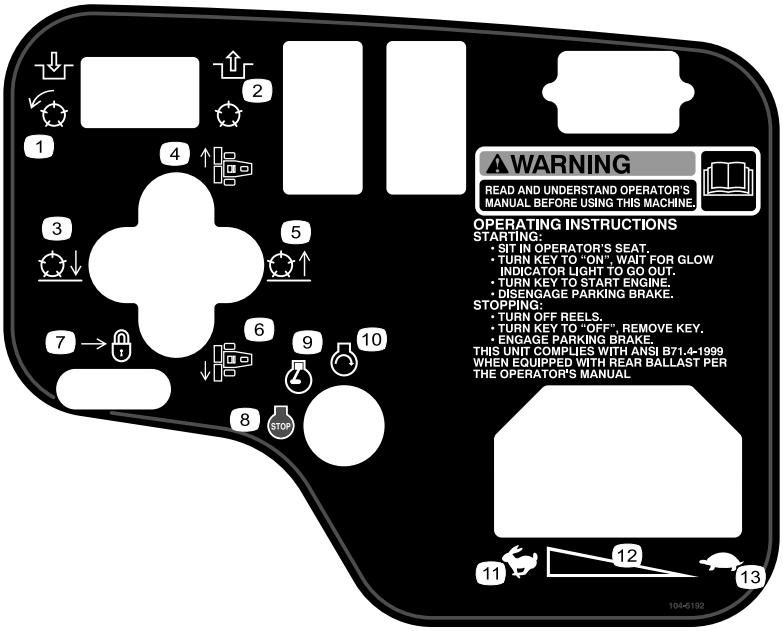
1. 警告： 表面が熱い。触れないこと。
2. ファンによる手足切断危険、およびベルトによる巻き込まれの危険：可動部に近づかないこと。



107-7801 (CE only)

この安全ステッカーには、ヨーロッパの芝刈り機安全規格 EN 836:1997 に適合するために必要な、斜面での運転に関する注意事項が記載されています。ここに記載されている斜面の角度は、この規格で記述され、また要求されている控えめな角度です。

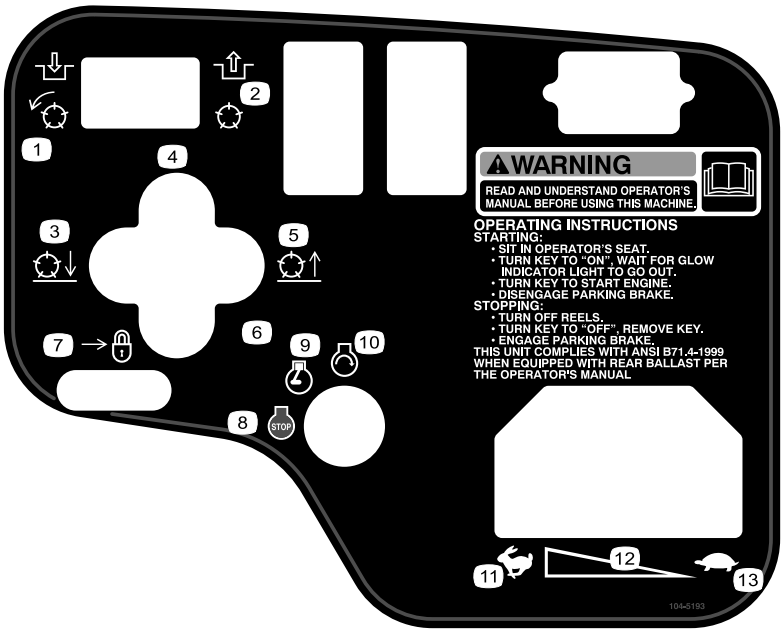
1. 転倒の危険：傾斜が15度以上の斜面に乗り入れないこと。



104-5192

モデル 03207 のみ

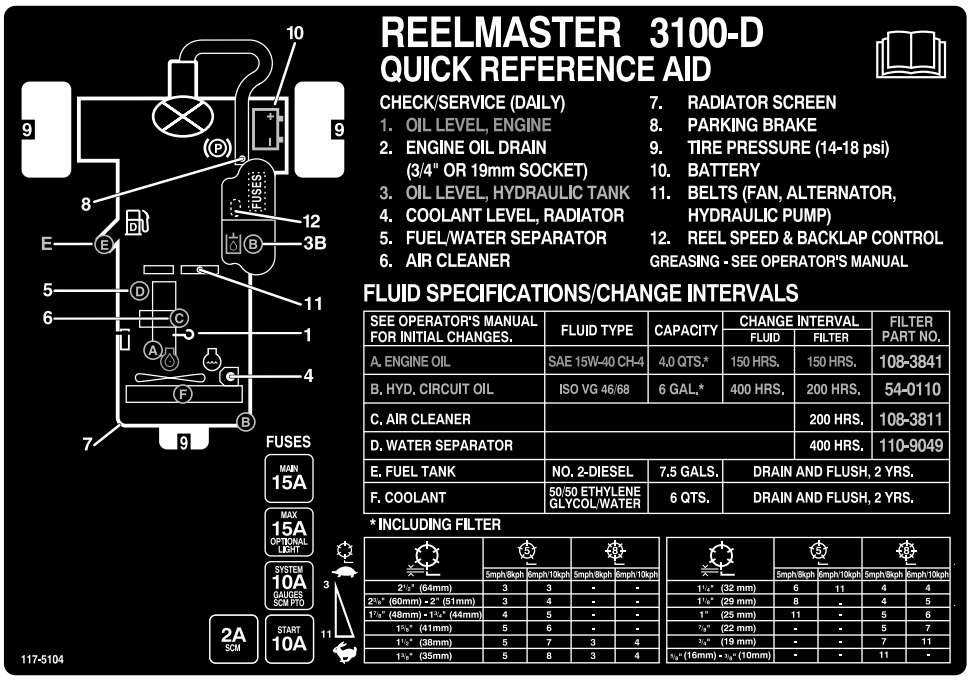
1. PTO接続
2. PTO解除
3. カッティングユニット下降.
4. カッティングユニットを右へ移動
5. カッティングユニット上昇.
6. カッティングユニットを左へ移動
7. 後ろに引くとレバーをロック
8. エンジン： 停止
9. エンジン： 作動
10. エンジン： 始動
11. 高速
12. 無段階調整
13. 低速



104–5193

モデル 03206 のみ

1. PTO接続
2. PTO解除
3. カッティングユニット下降.
4. カッティングユニットを右へ移動
5. カッティングユニット上昇.
6. カッティングユニットを左へ移動
7. 後ろに引くとレバーをロック
8. エンジン: 停止
9. エンジン: 作動
10. エンジン: 始動
11. 高速
12. 無段階調整
13. 低速



117–5104

バッテリーに関する注意標識

全てがついていない場合もあります

1. 爆発の危険
2. 火気厳禁、禁煙厳守のこと。
3. 劇薬につき火傷の危険あり
4. 保護メガネ等着用のこと
5. オペレーターズマニュアル*を読むこと*。
6. バッテリーに人を近づけないこと。
7. 保護メガネ等着用のこと: 爆発性ガスにつき失明等の危険あり
8. バッテリー液で失明や火傷の危険あり。
9. 液が目に入ったら直ちに真水で洗眼し医師の手当てを受けること。
10. 鉛含有 : 普通ゴミとして投棄禁止。

組み立て

付属部品

すべての部品がそろっているか、下の表で確認してください。

手順	内容	数量	用途
1	前輪アセンブリ 後輪アセンブリ	2 1	車輪を取り付けます
2	ハンドル ハンドルのキャップ ワッシャ（大） ジャム・ナット ねじ	1 1 1 1 1	ハンドルを取り付ける
3	電解液	所用量	バッテリーに電解液を入れて充電し、機体に取り付けます。
4	傾斜計	1	傾斜計を点検します。
5	ロック･ブラケット リベット ワッシャ ねじ, 1/4 x 2 inches ロックナット, 1/4 inch	1 2 1 1 1	フード･ラッチを取り付け（CE 規格）ます。
6	排気管ガード タップネジ	1 4	排気管ガードを取り付け（欧州規格）ます。
7	ロール・バー・アセンブリ フランジヘッド･ボルト ロックナット ホース･クランプ	1 4 4 1	ROPSを取り付けます。
8	昇降アーム ピボット・ロッド Bolt (5/16 x 7/8 inch)	2 2 2	前昇降アームを取り付けます（昇降アームキットに同梱）
9	必要なパーツはありません。	–	カッティングユニットにキャリア・フレームを取り付けます
10	必要なパーツはありません。	–	カッティングユニットを取り付けます。
11	必要なパーツはありません。	–	リール・モータを取り付けます
12	必要なパーツはありません。	–	昇降アームを調整します。

その他の付属品

内容	数量	用途
CE 用ステッカー	6	欧州規格の場合に既存の英語のステッカーの上から貼付します。
始動キー	2	エンジンを掛ける。
オペレーターズマニュアル エンジンマニュアル	1 1	ご使用前にお読みください。
パーツカタログ	1	交換部品の注文などにご利用ください。
オペレータのためのトレーニング資料	1	ご使用前にご覧ください。
納品前検査票	1	マシンの組み立てが正しく行なわれていることを確認してください。
認証証明書	1	CE 規格に適合していることを証明する書類です

注 前後左右は運転位置からみた方向です。

1

車輪を取り付ける

この作業に必要なパーツ

2	前輪アセンブリ
1	後輪アセンブリ

手順

1. 各ホイール・ハブに車輪を取り付ける（空気注入バルブが外側を向くように取り付けること）。

   重要 後輪のリムは前輪のリムより細くなっています。

2. ホイール・ナットを45～65 ft-lb.（61～75 Nm = 6.2～8.9 kg.m）にトルク締めする。

2

ハンドルを取り付ける

この作業に必要なパーツ

1	ハンドル
1	ハンドルのキャップ
1	ワッシャ（大）
1	ジャム・ナット
1	ねじ

手順

1. ハンドルをステアリング シャフトにはめ込む（図 3）。

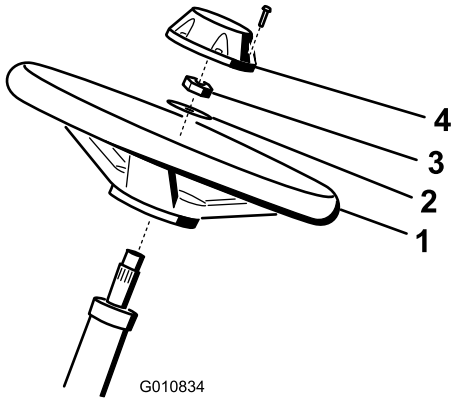


図 3

1. ハンドル
2. ワッシャ
3. ジャムナット
4. キャップ

2. ワッシャをステアリング･シャフトにはめ込む（図 3）。
3. ジャムナットでハンドルを固定し、2.8～3.6 kg.mに トルク締めする（図 3）。
4. キャップを取り付け、ねじで固定する（図 3）。

3

バッテリーを充電し機体に取り付ける

この作業に必要なパーツ

所用量	電解液

手順

警告

カリフォルニア州
第65号決議による警告

バッテリーの電極部や端子などの部分には鉛や鉛含有物質が含まれており、カリフォルニア州では、これらの物質が癌や先天性異常の原因となるとされている。
取り扱い後は手を洗うこと。

注 バッテリーに液が入っていない場合には、比重 1.260 のバッテリー液を購入してバッテリーの各セルに入れてください。

⚠ 危険

電解液には触れると火傷を起こす劇薬である硫酸が含まれている。

- **電解液を飲まないこと。また、電解液を皮膚や目や衣服に付けないよう十分注意すること。安全ゴーグルとゴム手袋で目と手を保護すること。**
- **皮膚に付いた場合にすぐに洗浄できるよう、必ず十分な量の真水を用意しておくこと。**

1. 比重 1.260 のバッテリー液を購入してください。
2. フードを開ける。
3. バッテリーカバーを取り外す（図 4）。

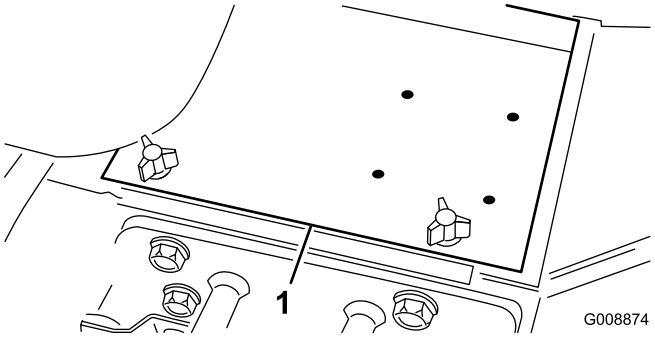


図 4

1. バッテリーカバー

4. バッテリーの各セルからキャップをはずし、上限までゆっくり液を満たす。
5. 各セルのキャップを取り付け、バッテリーを充電器に接続し、充電電流を 3～4 A にセットする。3～4 Aで4～8時間充電する。

⚠ 警告

充電中は爆発性のガスが発生する。

- **バッテリーにタバコの火、火花などの火気を近づけないこと。**
- **バッテリーの近くでは絶対に喫煙しない。**

6. 充電が終わったらチャージャをコンセントから抜き、バッテリー端子からはずす。
7. キャップを取る。補給リングの高さまで、各セルにバッテリー液を補給する。キャップを取り付ける。

   重要 バッテリー液を入れすぎないようにしてください。バッテリー液があふれ出て他の部分に触れると激しい腐食を起こします。

8. 赤い（＋）ケーブルをバッテリーの（＋）端子に、黒いケーブル（－）はバッテリーの（－）端子にはめ、ボルトとナットで固定する（図 5）。プラス端子が電極に十分にはまり込んでいること、ケーブルの配線に無理がないことを確認する。ケーブルとバッテリーカバーを接触させないこと。

⚠ 警告

バッテリーケーブルの接続手順が不適切であるとケーブルがショートを起こして火花が発生する。それによって水素ガスが爆発を起こし人身事故に至る恐れがある。

- **ケーブルを取り外す時は、必ずマイナス（黒）ケーブルから取り外す。**
- **ケーブルを取り付ける時は、必ずプラス（赤）ケーブルから取り付け、それからマイナス（黒）ケーブルを取り付ける。**

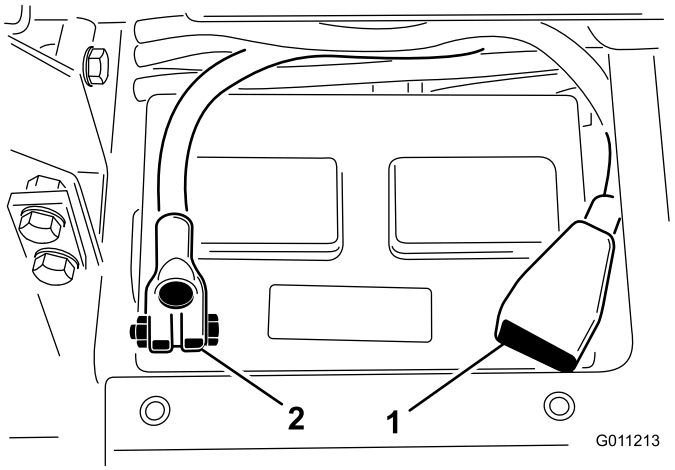


図 5

1. プラス（＋）バッテリーケーブル　2. マイナス（－）ケーブル

重要 バッテリーを機体から取り外した場合には、再取り付けに際して、必ず、クランプボルトの頭が下、ナットが上になるようにしてください。逆に取り付けると、カッティングユニットをシフトさせるときにボルトが油圧チューブに当たる可能性があります。

9. 腐食防止のために両方の端子部にワセリン（Grafo 112X: Toro P/N 505-47）またはグリスを薄く塗る。
10. ショート防止のために（＋）端子にゴムキャップをかぶせる。
11. バッテリーカバーを取り付ける。

4

傾斜計を点検する

この作業に必要なパーツ

1	傾斜計

手順

⚠ 危険

横転事故の危険を減らすため、25 度以上の傾斜面では作業しないでください；

1. 凹凸のない水平な場所に駐車する。
2. 機体のクロスビーム（燃料タンク脇）に携帯斜面計（付属品）を置いて、機体が水平になっていることを確認する（図 6）。このとき、運転席に座った状態で、機体に装着されている傾斜計の読みが 0° であれば問題ない。

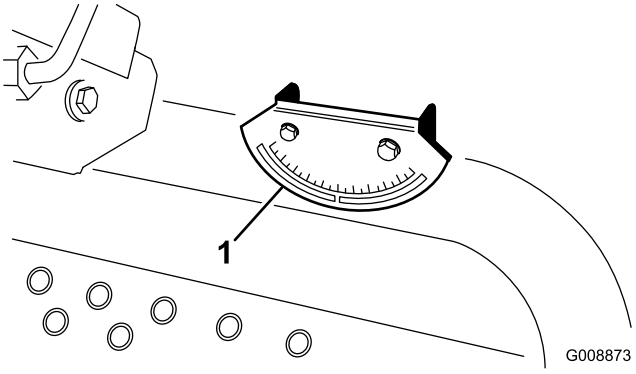


図 6

1. 傾斜計

---

3. 携帯斜面計で0° の読みが出ない場合には、駐車場所を変えて、携帯斜面計の読みで0° になるように駐車し直す。この状態で、機体に装着されている傾斜計の読みが 0° でなければいけない。
4. 機体に装着されている傾斜計の読みが 0° でない場合には、機体の傾斜計の取り付けネジをゆるめて 0° の読みが出る位置に調整し、ネジを締めて調整を固定する。

5

フード･ラッチを取り付ける（CE 規格）

この作業に必要なパーツ

1	ロック･ブラケット
2	リベット
1	ワッシャ
1	ねじ, 1/4 x 2 inches
1	ロックナット, 1/4 inch

手順

1. フードラッチブラケットからフードラッチを外す。
2. フードラッチブラケットをフードに固定しているリベット（2本）を外す（図 7）。フードからフード･ラッチ･ブラケットを取り外す。

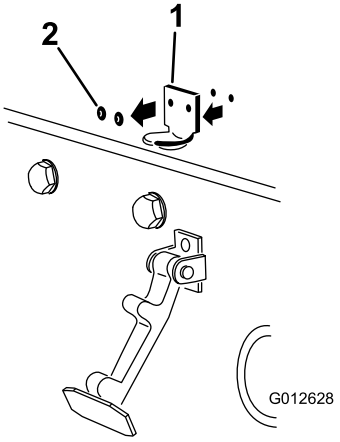


図 7

1. フード･ラッチ･ブラケット　2. リベット

3. CE 用ロックブラケットとフードラッチブラケットの取り付け穴をそろえて、フードの上に位置決めする。ロックブラケットをフードに当てて取り付ける（図 8）。ロックブラケットアームからボルト&ナットアセンブリを外してしまわないこと。

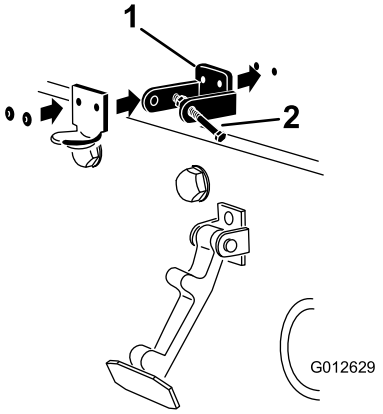


図 8

1. CE 用ロック･ブラケット　2. ボルト＆ナット･アセンブリ

4. フードの内側にある穴に、ワッシャを整列させる。
5. ブラケットとワッシャをフードにリベットで固定する（図 8）。
6. フード･ラッチブラケットにラッチを入れる（図 9）。

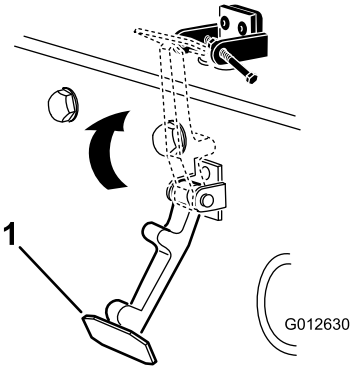


図 9

1. フードのラッチ

7. フードロックブラケットのもう一方のアームにボルトを取り付けてラッチを固定する（図 10）。ボルトはしっかりと固定するがナットの締め付けは行わないこと。

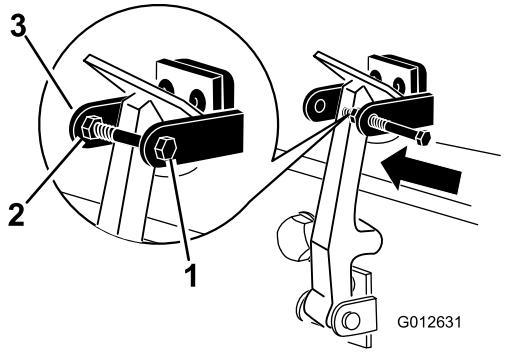


図 10

1. ボルト
2. ナット
3. フードロックブラケットのアーム

6

排気管ガードを取り付ける（CE 規格）

この作業に必要なパーツ

1	排気管ガード
4	タップネジ

手順

1. フレームについている取り付け穴に合わせてマフラー部にガードを取り付ける（図 11）。

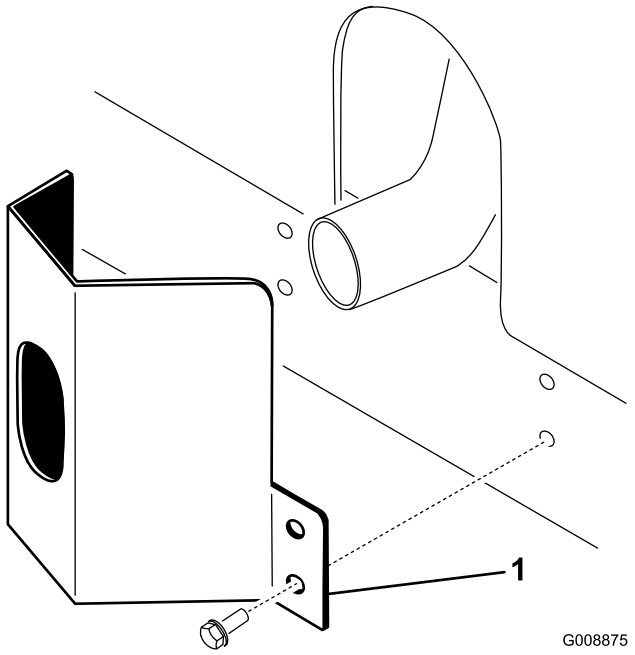


図 11

1. 排気管ガード

2. タップ･ネジ４本で固定する（図 11）。

7

ROPSを取り付ける

この作業に必要なパーツ

1	ロール･バー･アセンブリ
4	フランジヘッド･ボルト
4	ロックナット
1	ホース･クランプ

手順

重要 ROPSは絶対に改造したり溶接したりしないでください。ROPSが破損した場合には、修理せず、新しいものと交換してください。メーカーの許可 なくROPSを改造することを禁じます。

1. ROPS を機体の固定穴に差し込み、取り付け穴を整列させる。ROPSについている換気管が機体の左側にくるように配置すること（図 12）。

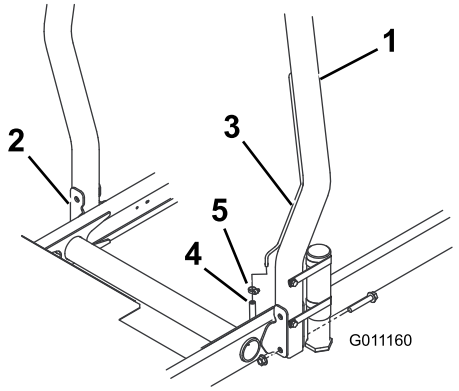


図 12

1. 横転保護バー（ROPS）
2. 取り付けブラケット
3. 通気管
4. 燃料ラインの換気チューブ
5. ホース･クランプ

2. ROPS のそれぞれの側をフランジヘッド・キャップ スクリュとロックナット（各 2）で固定する（図 12）。60 ft-l bs（8.3 kg.m）にトルク締めする。
3. 燃料タンクからの換気チューブを ROPS の換気管に接続する（付属部品のホース・クランプを使用する）。

⚠ 注意

燃料タンクからの換気チューブをROPSの換気管に 接続しないでエンジンを始動させると、燃料が換気チューブからあふれ出る。

8

前昇降アームを取り付ける

この作業に必要なパーツ

2	昇降アーム
2	ピボット･ロッド
2	Bolt (5/16 x 7/8 inch)

手順

1. 昇降アームのピボット・シャフト・リンクとピボッ ト・シャフトを分離（キャップスクリュ 2 個を外す）し、とりはずしたリンクとキャップスクリュは保管する（図 13）。

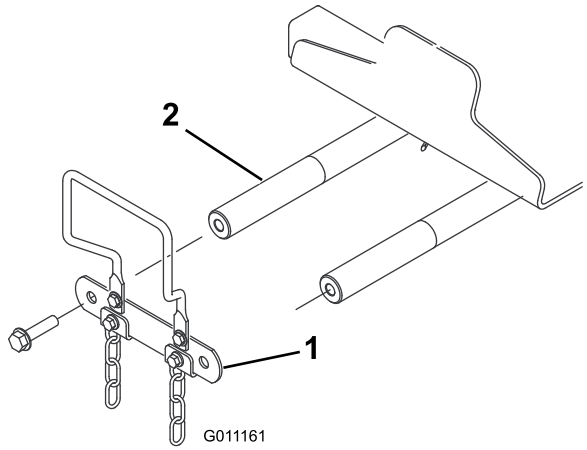


図 13

1. 昇降アームのピボット･シャフト･リンク
2. 昇降アームのピボット･シャフト

2. 左右の昇降アームにそれぞれピボット・ロッドを差し込み、取り付け穴を整列させる（図 14）。

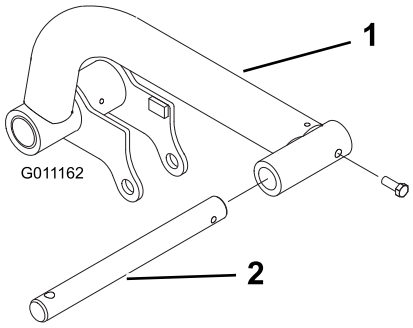


図 14

1. 昇降アーム
2. ピボット･ロッド

3. ピボット・ロッドを昇降アームに固定する（(5/16 x 7/8 inch) （2本）。
4. 左右の昇降アームをそれぞれピボット・シャフト（図 15）に差し込み、保管しておいたピボット・シャフト・リ ンクとキャップスクリュを取り付けて固定する。

   注 70 ft-lb（9.7 kg.m）にトルク締めする。

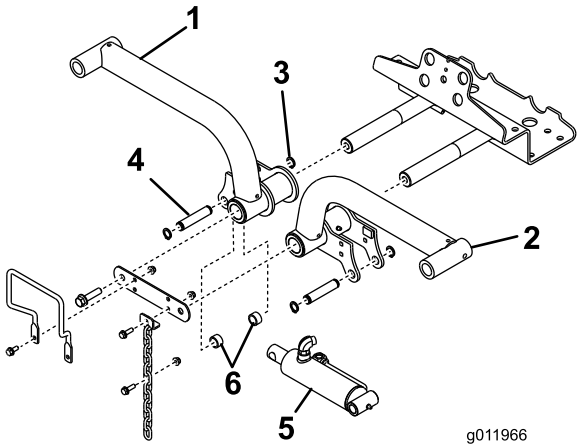


図 15

1. 昇降アーム（右）
2. リテーナ・リング
3. 昇降アーム（左）
4. 昇降シリンダ
5. スペーサ（2 個）
6. 取り付けピン

5. 昇降シリンダの両端についているピンの後部についているリテーナ・リングを取り外す。
6. 昇降シリンダの右端を右昇降アームに連結する（ピン 1 本とスペーサ 2 個）（図 15）。リテーナ・リングで固定する。
7. 昇降シリンダの左端を左昇降アームに連結する（ピン 1 本）。リテーナ・リングで固定する。

9

カッティングユニットにキャリア・フレームを取り付ける

必要なパーツはありません。

手順

1. カッティングユニットをカートンから取り出す。同梱の*カッティングユニットのオペレーターズマニュアル*に従って調整する。
2. 前キャリア・フレーム（図 16）を各前カッティング ユニットに載せる。

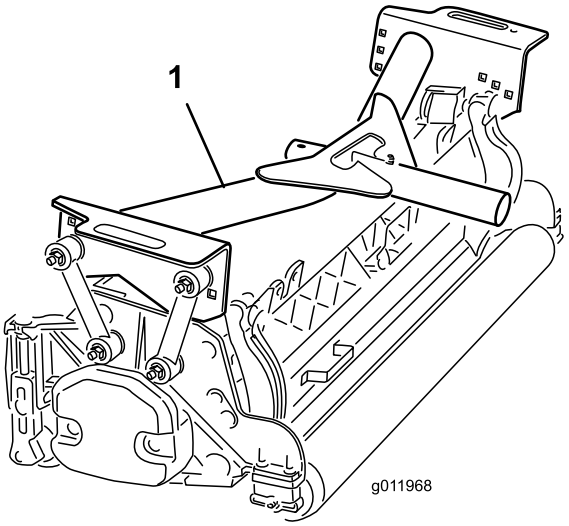


図 16

1. 前キャリア・フレーム

3. 以下の要領で、取り付けリンクを **前**キャリア・フレームに固定する：
   - 前取り付けリンクは、ボルト（3/8 x 2-1/4 inch）、平ワッシャ 2 枚、ロックナット 1 個を使い、図 17 のように中央のキャリア・フレームの穴に取り付ける。取り付ける時にリンクの各側にワッシャを入れる。4.3 kg.mにトルク締めする。
   - 後取り付けリンクは、ボルト（3/8 x 2-1/4 inch）、平ワッシャ 2 枚、ロックナット 1 個を使い、図 17 のように中央のキャリア・フレームの穴に取り付ける。取り付ける時にリンクの各側にワッシャを入れる。4.3 kg.mにトルク締めする。

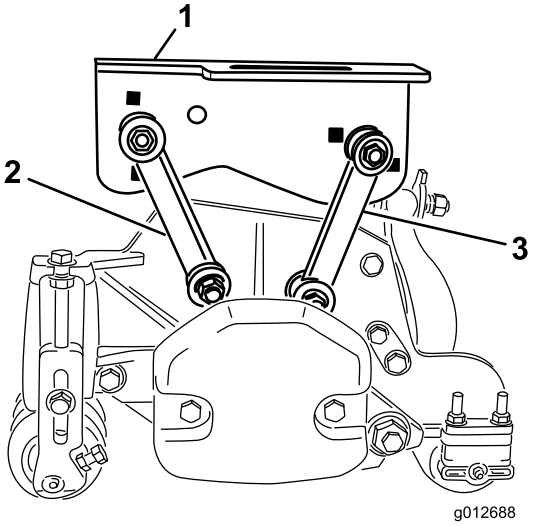


図 17

1. 前キャリア・フレーム
2. 前取り付けリンク
3. 後取り付けリンク

4. 後キャリア・フレーム（図 18）を後カッティング ユニットに載せる。

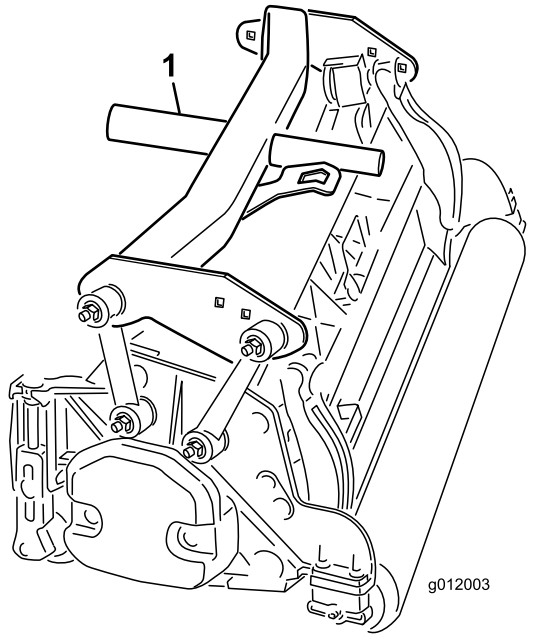


図 18

1. 後キャリア・フレーム

5. 以下の要領で、取り付けリンクを **後**キャリア・フレームに固定する：
   - 前取り付けリンクは、ボルト（3/8 x 2-1/4 inch）、平ワッシャ 2 枚、ロックナット 1 個を使い、図 19 のようにキャリア・フレームの穴に取り付ける。取り付ける時にリンクの各側にワッシャを入れる。4.3 kg.mにトルク締めする。
   - 後取り付けリンクは、ボルト（3/8 x 2-1/4 inch）、平ワッシャ 2 枚、ロックナット 1 個を使い、図 19 のように後キャリア・フレームの穴に取り付ける。取り付ける時にリンクの各側にワッシャを入れる。4.3 kg.mにトルク締めする。

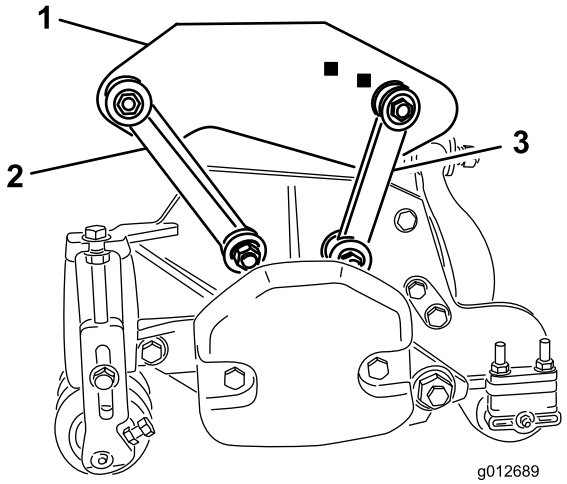


図 19

1. 後キャリア・フレーム
2. 前取り付けリンク
3. 後取り付けリンク

10

カッティングユニットを取り付ける

必要なパーツはありません。

手順

1. 各前昇降アームのピボット・ロッドにスラストワッ シャを通す。
2. ピボット・ロッドに、カッティングユニットのキャリアフレームを取り付け、リンチ・ピンで固定する（図 20）。

   注 後ろのカッティングユニットでは、キャリア・フレーム後部とリンチ・ピンとの間にスラストワッシャを入れます。

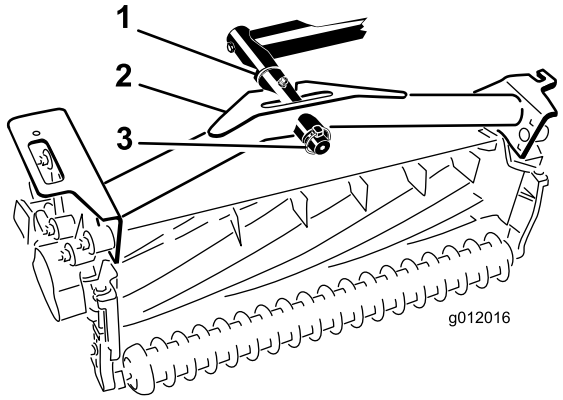


図 20

1. スラスト・ワッシャ
2. キャリア・フレーム
3. リンチ・ピン

3. 昇降アームとピボット部全部をグリスアップする。

重要 ホースが折れたりひねられたり強く曲げられたりしていないことを確認してください； 図 21のようなルートが適切です。カッティングユニットを上昇させ、左にスライドさせてください（モデル 03170）。後カッティングユニットのホースが走行ケーブル・ブラケットに当たらないことを確認し、必要に応じて接続部やホースの位置を再調 整してください。

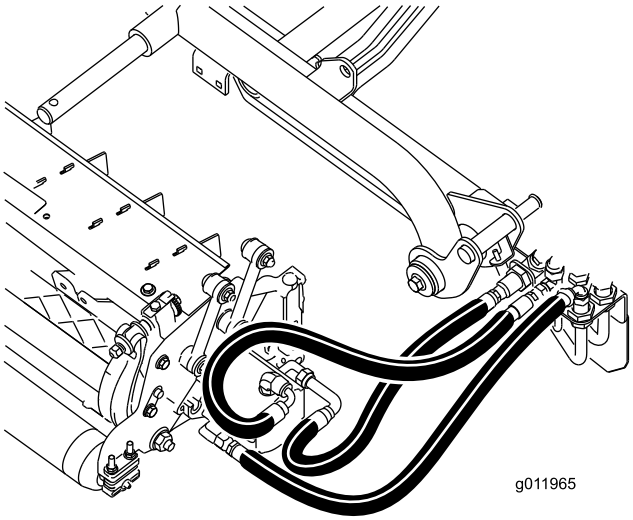


図 21

4. 各キャリア・フレームのスロットにチッパー・チェーンを下から上に通し、これらのチェーンをキャリア・フレームの上に固定する（キャップスクリュ、ワ ッシャ、ロックナットを使用）（図 22）。

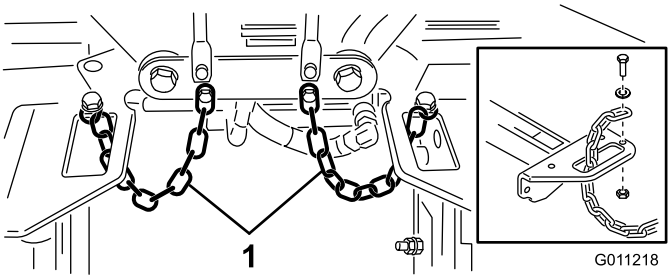


図 22

1. チッパー・チェーン

11

リール・モータを取り付ける

必要なパーツはありません。

手順

1. 各ユニットをピボット・ロッドの前に置く。
2. 右側カッティングユニットの内側端部からウェイトと0リング（図 23）を取る。

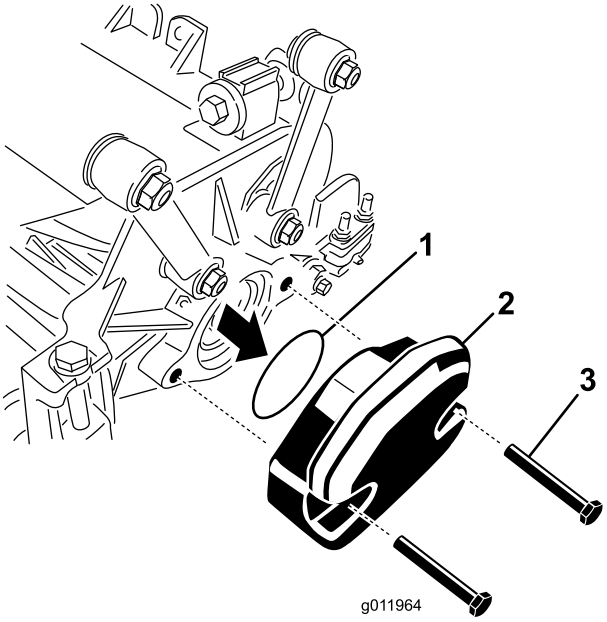


図 23

1. O リング
2. ウェイト
3. 取り付けボルト

3. ユニット外側のベアリング・ハウジングのプラグを抜いて、そこにウェイトとガスケット取り付ける。
4. 残りのカッティングユニットからは、ベアリング・ハウジングに入っている出荷用のプラグ（栓）を取り出す。

5. 駆動モータのフランジにOリング（カッティングユニットの付属部品）を取り付ける（図 24）。

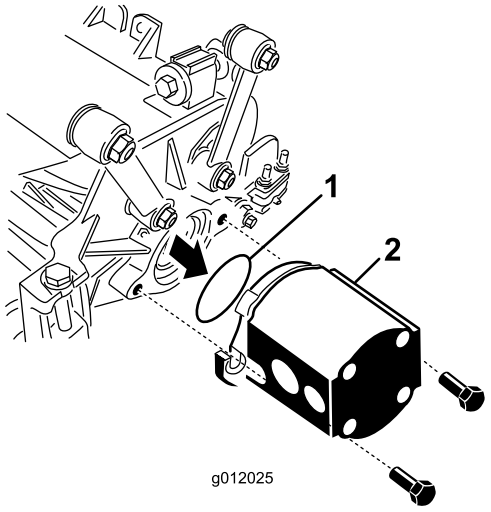


図 24

1. O リング
2. リール･モータ

6. リールモータを各カッティングユニットに装着し、カッティングユニットの付属部品のキャップスクリュ 2 本で固定する（図 24）。

12

昇降アームを調整する

必要なパーツはありません。

手順

1. エンジンを始動し、カッティングユニットを上昇させ、各昇降アームとフロア･プレート･ブラケットの間のすきまが 5～8mm になっていることを確認する（図 25）。

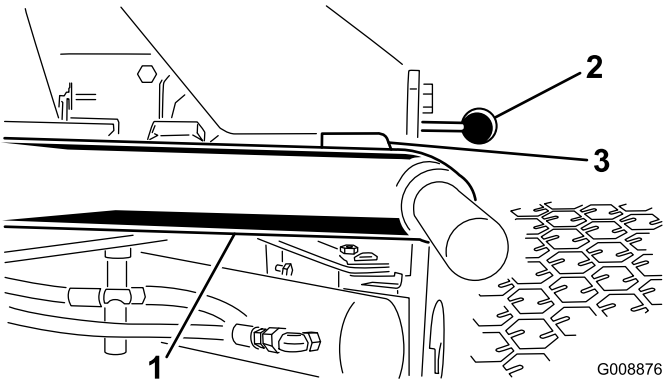


図 25

図はカッティングユニットを外した状態です。

1. 昇降アーム
2. フロア･プレートのブラケット
3. すきま

注 このすき間が基準通りでない場合には、以下の手順でシリンダを調整する：

A. ストップ・ボルトを戻して、シリンダを調整して必要なすきまを作る（図 26）。

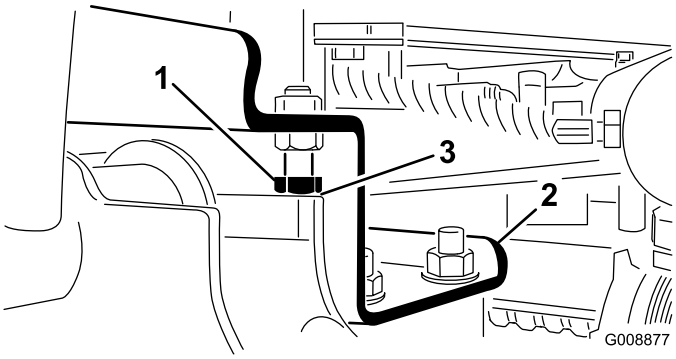


図 26

1. ストップ･ボルト
2. 昇降アーム
3. すきま

B. シリンダについているジャムナットを戻す（図 27）。

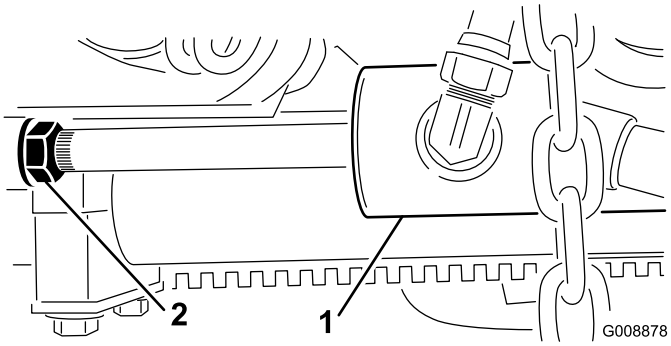


図 27

1. 前シリンダ
2. ジャムナット

C. ロッドの端部からピンを外し、クレビスを回転させる。

D. 調整が終わったらピンを取り付けて隙間の大きさを確認し、

E. その後、必要に応じて上記A～Dを繰り返す。

F. クレビスのジャム･ナットを締める。

注 移動走行中に後昇降アームが「ガタつく」ようであれば隙間を小さくしてください。

2. 各昇降アームとストップボルトとの隙間が0.13～1.02mmの間にあるかどうか点検する(図 26)。

注 この範囲になければストップボルトを調整する。

3. エンジンを始動し、カッティングユニットを上昇させ、後ろカッティングユニットのウェア･バーの上部についているウェア･ストラップからバンパー･ストラップまでの距離が 0.5～2.5 mm の間にあるかどうか点検する（図 28）。

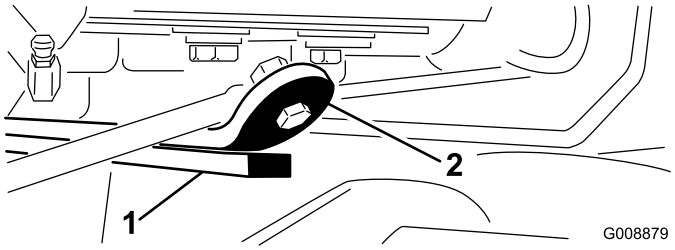


図 28

1. ウェア･バー　　2. バンパー･ストラップ

このすき間が基準通りでない場合には、以下の手順で後シリンダを調整する：

A. カッティングユニットを降下させ、シリンダについているジャムナットを戻す（図 29）。

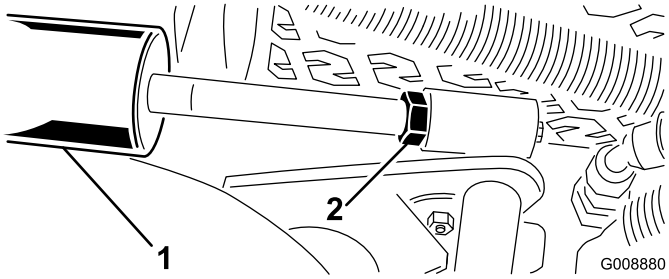


図 29

1. 後シリンダ　　2. 調整ナット

B. ジャムナットを戻すには、シリンダ･ロッドのナットに近い方の部分をウェスとプライヤで握って回す。

C. 調整ができたらカッティングユニットを上昇させて隙間を点検し、

D. その後、必要に応じて上記A～Cを繰り返す。

E. クレビスのジャム･ナットを締める。

重要 前ストップや後ウェアバーに隙間がないと昇降アームが破損する場合があります。

製品の概要

各部の名称と操作

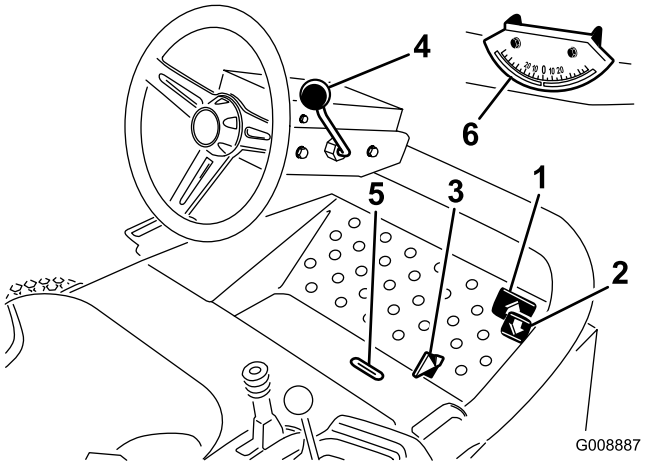


図 30

1. 前進走行ペダル
2. 後退走行ペダル
3. 刈り込み･移動走行切り換えレバー
4. チルト調整レバー
5. インジケータ窓
6. 傾斜計

走行ペダル

前進走行を行なうには、走行ペダル（図 30）を踏み込みます。後退ペダル（図 30）を踏み込むと後退しますが、前進走行中はブレーキとしてもこのペダルを使用できます。ペダルから足をはなせばニュートラル位置となり、車両は停止します。

刈り込み･移動走行切り換えレバー

かかとで操作するレバーです（図 30）。左位置で移動走行モード、右位置で刈り込みモードとなります。**カッティングユニットは刈り込みモード以外では動作しません。**

重要 刈り込み速度は出荷時の設定で 9.7 km/h ですが、ストップネジ（図 31）の調整で速度を上げることができます。

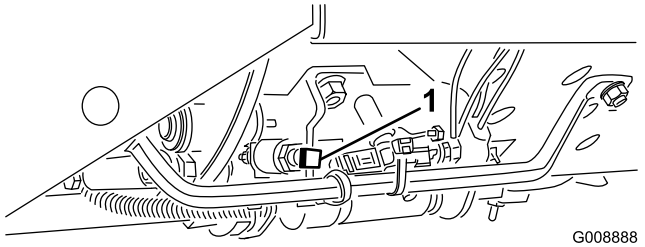


図 31

1. スピード･ストップ･ネジ

チルト調整レバー

このレバー（図 30）を手前に引いてハンドルを適当な位置に調整します； 調整ができたらレバーを前に倒して締めつけます。

インジケータ窓

カッティングユニットが中央位置にあるかどうかを確認するための窓（図 30）です。

傾斜計

機体の左右の傾きを表示する計器です（図 30）。

始動スイッチ

始動スイッチ（図 32）はエンジンの始動と停止および予熱を行うスイッチで、3 つの位置（Off, On/Preheat, Start）があります。キーを時計方向に回してON/Preheat 位置にすると、グロープラグが点灯してエンジンの予熱を開始します。約 7 秒後にグローインジケータが消えたら始動準備OK です。キーをStart 位置に回すとエンジンが始動します。エンジンが始動したら、キーから手を離してください。キーは自動的に On/Run 位置まで戻ります。エンジンを停止するときは、キーを左に回して OFF 位置にしますが、事故防止のため、使用しない時はキーを抜き取っておいてください。

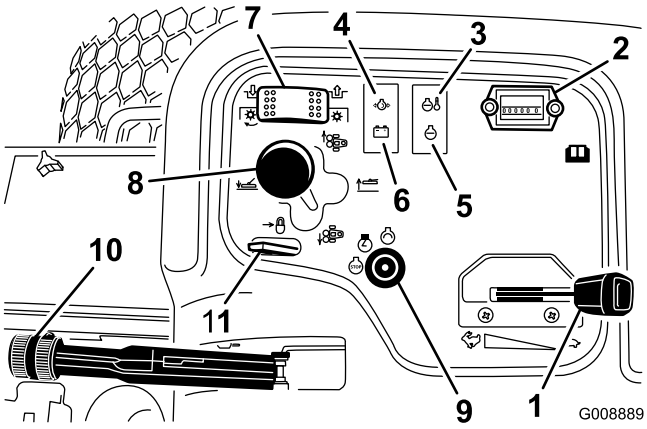


図 32

1. スロットル
2. アワーメータ
3. 冷却水温警告灯
4. オイル圧警告灯
5. グロープラグインジケータ
6. オルタネータ･ランプ
7. カッティングユニット回転スイッチ
8. カッティングユニットのシフト･レバー
9. 始動スイッチ
10. 駐車ブレーキ
11. 昇降レバー･ロック

スロットル

スロットル（図 32）を前に倒すとエンジン回転速度が速くなり、後ろに引くと遅くなります。

カッティングユニット回転スイッチ

2 つの位置があります（図 32）： 回転と回転停止の 2 つの位置です。バルブバンクの電磁弁を操作してリールを回転させるスイッチです。

アワーメータ

アワーメータ（図 32）は左側コントロールパネルにあって本機の稼働時間を積算表示します。このメータは始動スイッチをON位置にすると始動します。

カッティングユニットのシフト･レバー

このレバー（図 32）をに倒すとカッティングユニットが下降します。エンジンが作動していないとカッティングユニットは下降しません；また、上昇位置ではカッティングユニットは使用できません。レバーを手前の Raise 位置に引けばカッティングユニットは上昇します。

レバーを左右に動かすとカッティングユニットがその方向にスライドします。この操作はカッティングユニットを上昇させた状態で、または走行して芝刈り中に行ってください（モデル 03170 のみ）。

注 カッティングユニットを下降させる時、レバーを前位置に保持しておく必要はありません。

⚠ 危険

斜面を横断しているとき、カッティングデッキを谷側にシフトさせるのは重心を谷側に移すことになり、転倒など、生命に関わる重大な人身事故を起こしやすくなる。

斜面横断中はカッティングデッキを山側にシフトさせておくこと。

冷却水温警告灯

エンジンの冷却水の温度が異常に高くなると警告灯（図 32）が点灯します。トラクタの運転が停止されず、冷却水温度がさらに4° C 上昇すると自動的にエンジンを停止させます。

エンジンオイル圧警告灯

エンジン･オイルの圧力が異常に低下するとこの警告灯（図 32）が点灯します。

オルタネータ･ライト

オルタネータ･ランプ（図 32）は、エンジンが作動中は消えているのが正常です。点灯した場合は充電系統の異常ですから修理が必要です。

グロープラグインジケータ

グロープラグインジケータランプ（図 32）は、グロープラグが作動中に点灯します。

駐車ブレーキ

エンジンを停止させる時には、車体が不意に動き出さないよう、必ず駐車ブレーキ（図 32）を掛けてください。レバーを手前に引くと駐車ブレーキがかかります。駐車ブレーキが掛かっているのに走行ペダルが踏むとエンジンが停止します。

昇降レバー･ロック

昇降レバーロック（図 32）を後方に倒すとカッティングユニットがロックされ、落下を防止します。

リール速度コントロール

リール速度コントロールはコンソール・カバーの下にあります（図 33）。刈り高に適した希望のクリップ（リール回転速度）を選択することができます； リール速度コントロール・ノブを、刈高と刈り込み速度に合った適切な位置に合わせてください。「クリップ・レート（リール速度）を選択する」を参照してください。

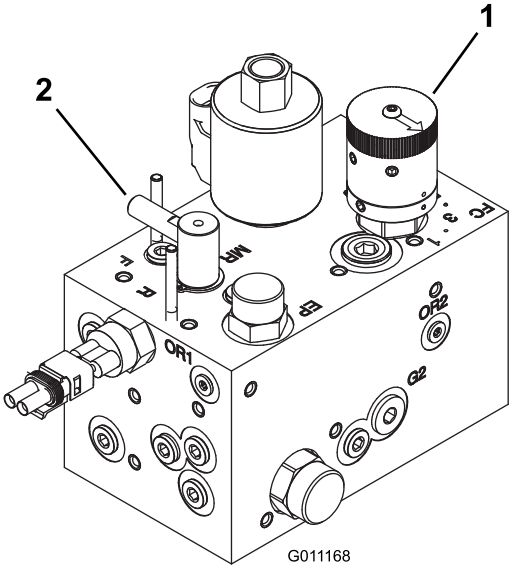


図 33

1. リール速度コントロール　　2. バックラップ･コントロール

バックラップ・コントロール

バックラップ・コントロールはコンソール・カバーの下にあります（図 33）。ノブを R に回すとバックラップ、F に回すと刈り込みモードになります。リールが回転している時はノブを操作しないでください。

燃料計

燃料計（図 34）は、燃料タンクに残っている燃料の量を表示します。

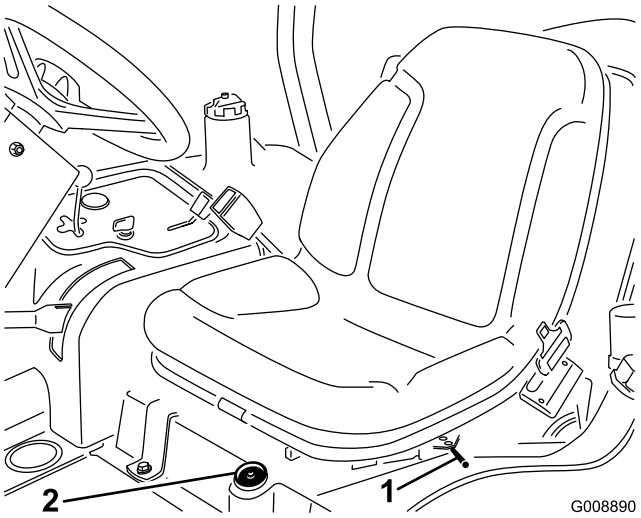


図 34

1. 前後調整レバー　　2. 燃料計

座席調整レバーによる調整

運転席の横についているレバー(図 34)を外側に引いて運転席を希望の位置にスライドさせ、その位置でレバーから手を離すと運転席が固定されます。

仕様

注 仕様や設計は予告なく変更されることがあります。

移動走行時の幅:	刈り幅 72″(183 cm)のとき 203 cm 刈り幅 85″(216 cm)のとき 234 cm
刈幅	刈り幅 85″(216 cm)のとき 183 cm
長さ	248 cm
高さ	180 cm（ROPS を含む）
純重量(ネット)*	844 kg
燃料タンク容量	28 リットル
走行速度	刈り込み: 0-10 km/h; 移動走行:0-14 km/h後退速度: 0-6 km/h
* カッティングユニットと油脂類を含む。	

アタッチメントやアクセサリ

メーカーが認定する Toro 様々なアタッチメントやアクセサリでお仕事の幅をさらに広げてください。アタッチメントやアクセサリについての情報は、 正規ディーラー またはディストリビュータへ。インターネット www.Toro.com もご利用ください。

運転操作

注 前後左右は運転位置からみた方向です。

エンジンオイルの量を点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

エンジンにはオイルを入れて出荷していますが、初回運転の前後に必ずエンジンオイルの量を確認してください。

油量は約 2.8 リットル（フィルタ共）です。

以下の条件を満たす高品質なエンジンオイルを使用してください：

- API規格CH-4、CI-4 またはそれ以上のクラス。
- 推奨オイル：SAE 15W-40（-17℃以上）
- 他に使用可能なオイル：SAE 10W-30 または 5W-30（全温度帯）

注 Toro のプレミアム・エンジン・オイル（10W-30 または 5W-30）を代理店にてお求めいただくことができます。パーツカタログでパーツ番号をご確認ください。

注 エンジン･オイルを点検する最もよいタイミングは、その日の仕事を始める直前、エンジンがまだ冷えているうちです。既にエンジンを始動してしまった場合には、一旦エンジンを停止し、オイルが戻ってくるまで約 10 分間程度待ってください。油量がディップスティックのADDマークにある場合は、FULLマークまで補給してください。**入れすぎないこと。**油量がADD マークと FULL マークの間であれば補給の必要はありません。

1. 平らな場所に駐車する。
2. ディップスティック（図 35）を抜き､ウェスで一度きれいに拭く。

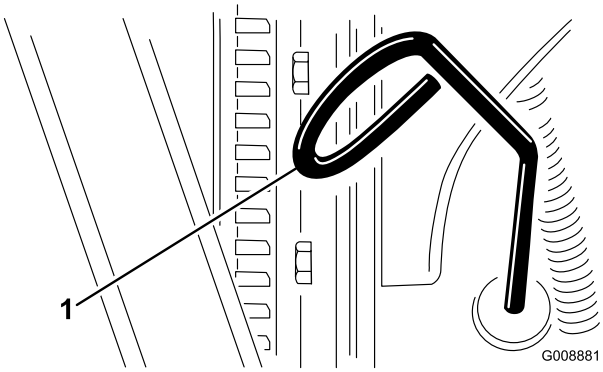


図 35

1. ディップスティック

3. ディップスティックをチューブの根元までしっかりと差し込んでから抜き取り、オイルの量を点検する。
4. 不足していれば補給口キャップ（図 36）をとり、ディップスティックのFull 位置まで少量ずつオイルを補給する。補給中、ディップスティックで何度か油量を確認しながら入れること。

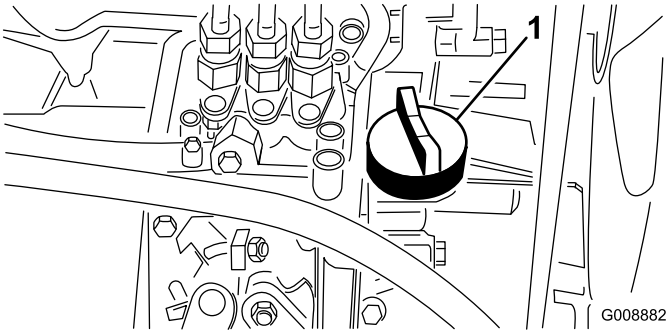


図 36

1. エンジンオイルキャップ

5. オイルキャップとディップスティックを取り付け、フードを閉じる。

重要 エンジンオイルの量が常時ゲージの上限と下限との間にあるよう、気をつけて管理してください。オイルの入れすぎもオイルの不足も、エンジンの不調や故障の原因となります。

燃料を補給する

⚠ 危険

軽油は条件次第で簡単に引火･爆発する。発火したり爆発したりすると、やけどや火災などを引き起こす。

- **燃料補給は必ず屋外で、エンジンが冷えた状態で行う。こぼれた燃料はふき取る。**
- **燃料タンク一杯に入れないこと。給油は燃料タンクの首の根元から6～13 ㎜ 下までとする。これは、温度が上昇して燃料が膨張したときにあふれないように空間を確保するためである。**
- **燃料取り扱い中は禁煙を厳守し、火花や炎を絶対に近づけない。**
- **安全で汚れのない認可された容器で保存し、容器には必ずキャップをはめること。**

硫黄分の少ない（微量：500 ppm 未満、または極微量：15 ppm 未満）の新しい軽油またはバイオディーゼル燃料以外は使用しないでく

ださい。セタン値が 40以上のものをお使いください。燃料の劣化を避けるため、180日以内に使いきれる程度の量を購入するようにしてください。

燃料タンク容量は約 28 リットルです。

気温が -7° 以上では夏用燃料（2号軽油）を使用しますが、気温が -7° 以下の季節には冬用燃料（1号軽油または1号と2号の混合）を使用してください。低温下で冬用ディーゼル燃料を使うと、発火点や流動点が下がってエンジンが始動しやすくなるばかりでなく、フィルタの目詰まりを防止できるなどの利点があります。

気温が -7° 以上の季節には夏用燃料を使用する方が、燃料ポンプの寿命を延ばします。

バイオディーゼル燃料対応

この機械はバイオディーゼル燃料を混合したB20燃料（バイオディーゼル燃料が20%、通常軽油が80%）を使用することができます。ただし、通常軽油は硫黄分の少ない、または極微量のものを使ってください。以下の注意を守ってお使いください。

- バイオディーゼル成分が ASTM D6751 または EN 14214 に適合していること。
- 混合後の成分構成が ASTM D975 または EN 590 に適合していること。
- バイオディーゼル混合燃料は塗装部を傷める可能性がある。
- 寒い地方ではB5（バイオディーゼル燃料が5%）またはそれ以下の製品を使用すること。
- 時間経過による劣化がありうるので、シール部分、ホース、ガスケットなど燃料に直接接する部分をまめに点検すること。
- バイオディーゼル燃料に切り換えた後に燃料フィルタが詰まる場合がある。
- バイオディーゼル燃料についてのより詳細な情報は代理店におたずねください。

1. 燃料タンクのキャップ（図 37）の周囲をきれいに拭く。

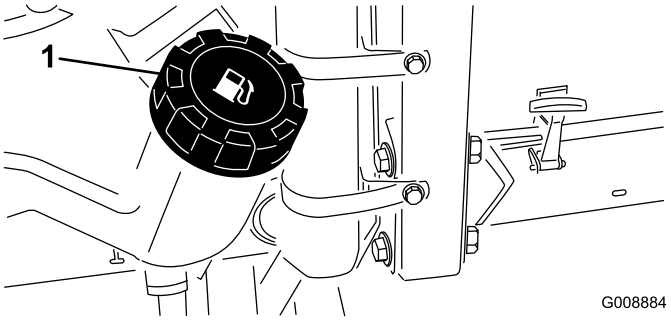


図 37

1. **燃料タンクのキャップ**

2. 燃料タンクのキャップを取る。
3. タンクの首の根元まで燃料を入れる。**入れすぎないこと。**
4. 給油が終わったらキャップを締める。
5. こぼれた燃料はふき取る。

冷却系統を点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

ラジエターとオイル･クーラ部分は毎日清掃してください（図 38）。非常にほこりの多い場所で作業をする場合には1時間ごとに清掃してください；「エンジンの冷却系統の清掃」を参照してください。

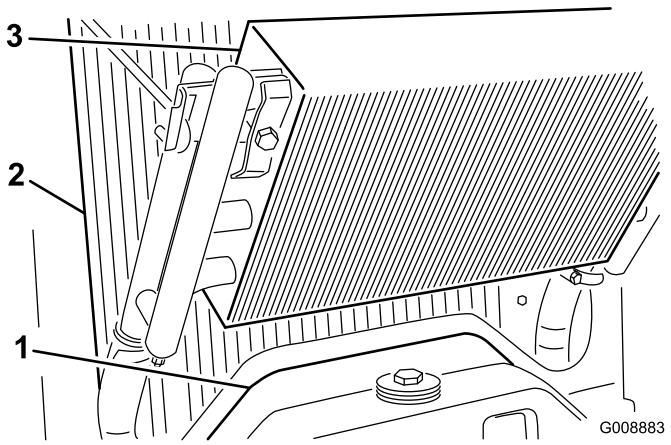


図 38

1. **アクセス･パネル**
2. **ラジエター**
3. **オイルクーラ**

ラジエターの冷却液は、水とエチレングリコール不凍液の 50/50 混合液です。毎日の作業前に液量を点検してください。

冷却液の容量は約 5.7 リットルです。

⚠ 注意

エンジン停止直後にラジエターのキャップを開けると、高温高圧の冷却液が吹き出してやけどを負う恐れがある。

- **エンジン回転中はラジエターのふたを開けないこと。**
- **キャップを開けるときはウェスなどを使い、高温の水蒸気を逃がしながらゆっくりと開けること。**

1. 補助タンクの冷却水量を点検する（図 39）。

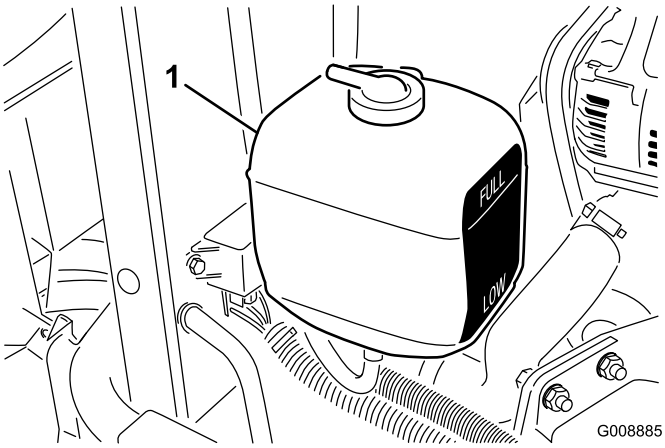


図 39

1. 補助タンク

注 エンジンが冷えた状態で、タンク側面についている２本の線の間にあれば適切である。

2. 冷却液の量が足りない場合には、補助タンクのキャップを取ってここから補給する。**入れすぎはよくない。**
3. 補助タンクのキャップを取り付けて終了。

油圧システムを点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日−油圧オイルの量を点検する。

油圧オイル･タンクに約 13.2 リットルの高品質油圧オイルを満たして出荷しています。**初めての運転の前に必ず油量を確認し、その後は毎日点検してください。**推奨オイルは、**オールシーズン用 Toro プレミアム油圧オイル**です。（19 リットル缶又はは 208 リットル缶で販売しています）。パーツカタログまたはToro代理店でパーツ番号をご確認ください。

他に使用可能なオイル：Toro のオイルが入手できない場合は、以下に挙げる特性条件および産業規格を満たすオイルを使用することができます。Toroでは合成オイルの使用をお奨めしておりません。オイルの専門業者と相談の上、適切なオイルを選択してください：

注 不適切なオイルの使用による損害については Toro は責任を持ちかねますので、品質の確かな製品をお使い下さる様お願いいたします。

高粘度インデックス／低流動点アンチウェア油圧作動液, ISO VG 46

物性:

粘度, ASTM D445	cSt @ 40° C 44 − 48 cSt @ 100° C 7.9 − 8.5
粘性インデックス ASTM D2270	140～160
流動点, ASTM D97	−37° C～−45° C

産業規格:

ヴィッカース I-286-S（品質レベル）, ヴィッカース M-2950-S（品質レベル）, デニソン HF-0

注 多くの油圧オイルはほとんど無色透明であり、そのためオイル洩れの発見が遅れがちです。油圧オイル用の着色剤（20cc 瓶）をお使いいただくと便利です。1瓶で15～22 リットルのオイルに使用できます。パーツ番号は P/N 44-2500； ご注文は Toro 代理店へ。

生分解油圧オイル − Mobil 224H

Toro 生分解油圧オイルを販売しています（19 リットル缶または 208 リットル缶）。パーツカタログまたはToro代理店でパーツ番号をご確認ください。

他に使用可能なオイル： Mobil EAL 224H

植物性オイルをベースにしたオイルでありToro 社が本機への使用を認めている唯一の生分解オイルです。通常の油圧オイルに比べて高温への耐性が低いので、本書の記述に従って必要に応じてオイルクーラを装備し、所定の交換間隔を守ってお使いください。鉱物性のオイルが混合すると、生分解オイルの毒性や生分解性能が悪影響を受けます。従って、通常のオイルから生分解オイルに変更する場合には、所定の内部洗浄手順を守ってください。くわしくはToro 代理店にご相談 ください。

1. 平らな場所に駐車し、カッティングユニットを降下させ、エンジンを停止させる。
2. 油圧オイルタンクの注油口周辺をきれいに拭き、キャップ（図 40）を外す。

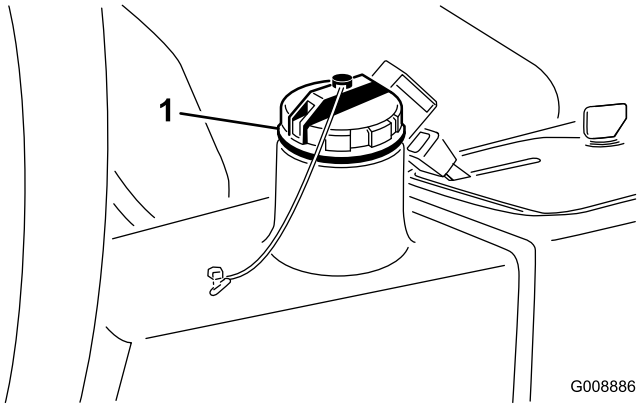


図 40

1. 油圧オイル・タンクのキャップ

3. 補給口の首からディップスティックを抜き、ウ ェスできれいに拭う。もう一度首に差し込んで引き抜き、オイルの量を点検する。FULL 位置から上下6mm 程度の範囲内にあればよい。
4. 油量が少なければFULLマークまで補給する。
5. ディップスティックとキャップを取り付ける。

タイヤ空気圧を点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

タイヤは空気圧を高めに設定して出荷しています。運転前に正しいレベルに下げてください。適正範囲は前後輪 とも97～124 kPa（1.0-1.2 kg/cm2）です。

注 全部のタイヤを同じ圧力に調整しないと機械の性能が十分に発揮されず、刈り上がりの質が悪くなります。

⚠ 危険

タイヤ空気圧が不足すると、斜面で機体が不安定になり、転倒など、生命に関わる重大な人身事故を起こしやすくなる。

タイヤ空気圧は絶対に規定値以下に下げてはならない。

リールとベッドナイフの摺り合わせを点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

前日の調子に係わりなく、毎日の点検の一つとして必ずリールとベッドナイフの接触状態を点検してください。リールと下刃の全長にわたって軽い接触があれば適正です。（*カッティングユニットのオペレーターズマニュアルの*「リールと下刃の調整」の項を参照してください。）

ホイールナットのトルク締め

整備間隔: 使用開始後最初の 1 時間
使用開始後最初の 10 時間
200運転時間ごと

ホイール・ナットを61～88 Nm（3.1～4.5 kg.m）にトルク締めする。

⚠ 警告

適切なトルク締めを怠ると車輪の脱落や破損から人身事故につながる恐れがある。

エンジンの始動と停止

以下の場合には、エンジンを始動する前に燃料システムのエア抜きを実施する必要があります（「燃料系統」の「燃料システムからのエア抜き」を参照）：

- **新車を初めて始動する時。**
- **燃料切れでエンジンが停止した時**
- **燃料系統の整備作業、例えばフィルタ交換、セパレータの洗浄などを行った後**

エンジンの始動手順

1. 駐車ブレーキが掛かっていること、カッティングユニットの駆動スイッチが OFF 位置にあることを確認する。
2. 走行ペダルから足を外し、ペダルがニュートラル位置にあることを確認する。
3. スロットルをハーフ・スロットル位置にする。
4. キーを差し込み、ON/Preheat 位置に回すと、グロープラグが点灯してエンジンの予熱を開始する（約７秒間）；グローインジケータが消えたらキーをStart 位置に回すとセル・モータが始動する。エンジンが始動したら、キーから手を離す。

   注 キーは自動的に On/Run 位置まで戻ります。

   重要 スタータモータのオーバーヒートを防止するため、スタータは15 秒間以上連続で回転させないでください。10秒間連続で使用したら､60秒間の休止時間をとってください。
5. エンジンを初めて始動した時、エンジンのオーバーホールを行った後などは、1～2分間の時間を取って前進および後退走行の確

認を行う。また、昇降レバーやカッティングユニット駆動スイッチを操作して各部の作動状態を確認する。

注 ハンドルを左右それぞれいっぱいまで切って応答を確認する。以上の点検の後、エンジンを停止させ、オイル漏れや各部のゆるみなどがないかさらに点検する。

⚠ 注意

機体の点検を行う前に、機械の可動部がすべて完全 に停止していることを必ず確認すること。

エンジンの停止手順

エンジンを停止するには、スロットルをアイドル位置、カッティングユニット駆動スイッチを OFF 位置に戻し、始動キーをOFF位置に回して抜き取る。

注 事故防止のため、キーは抜き取っておく。

燃料系統からのエア抜き

1. 平らな場所に駐車し、燃料タンクに半分以上の燃料が残っていることを確認する。
2. ラッチを外してフードを開ける。

⚠ 危険

軽油は条件次第で簡単に引火･爆発する。発火したり爆発したりすると、やけどや火災などを引き起こす。

- **燃料補給は必ず屋外で、エンジンが冷えた状態で行う。こぼれた燃料はふき取る。**
- **燃料タンク一杯に入れないこと。給油は燃料タンクの首の根元から6～13㎜ 下までとする。これは、温度が上昇して燃料が膨張したときにあふれないように空間を確保するためである。**
- **燃料取り扱い中は禁煙を厳守し、火花や炎を絶対に近づけない。**
- **安全で汚れのない認可された容器で保存し、容器には必ずキャップをはめること。**

3. 燃料噴射ポンプについているエア抜きネジ（図 41）をゆるめる。

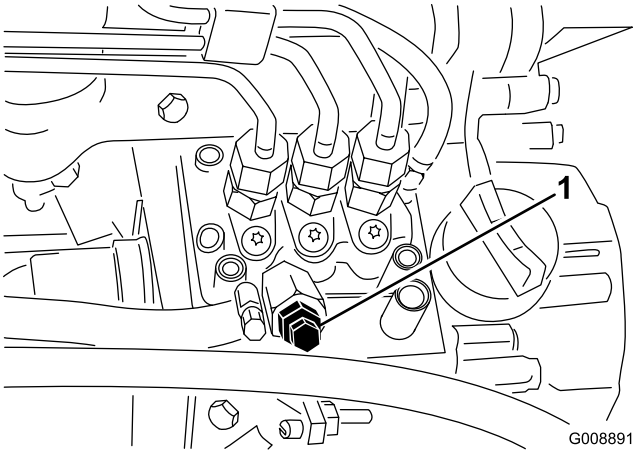


図 41

1. 燃料噴射ポンプのエア抜きネジ

4. 始動キーを ON 位置に回す。電動燃料ポンプが作動を開始し、エア抜きネジの周囲からエアが漏れ出てくるのが確認される。

   注 ネジから燃料が連続的に流れるのが見えるまでキーを ON 位置に保持する。

5. ネジを締めてキーをOFFに する。

注 通常は、上記のエア抜き操作でエンジンが始動できるようになります。もし始動できない場合は、噴射ポンプと噴射ノズルの間にエアが入っている場合がありますので、「インジェクタからのエア抜き」を参照してください。

インタロック･システムを点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

⚠ 注意

インタロック・スイッチは安全装置であり、これを取り外すと予期せぬ人身事故が起こり得る。

- **インタロックスイッチをいたずらしない。**
- **作業前にインタロックスイッチの動作を点検し、不具合があれば作業前に交換修理する。**

1. 無用の人間を遠ざける； また、点検中はカッティン グユニットに手足を近づけない。
2. カッティングユニットのスイッチをON位置または走行ペダルが踏まれた状態では、着席してもエンジンを始動することは出来ない。動くのはインタロックの故障であるから直ちに修理する。
3. 着席した状態で、走行ペダルをニュートラル位置にし、駐車ブレーキを解除し、カッ

ティングユニットのスイッチをOFF位置にセットする。エンジンを始動する。運転席から立ち上がり、走行ペダルをゆっくりと踏み込んでみる；1～3秒でエンジンが停止すれば正常。正しく動作しないのはインタロックの故障であるから直ちに修理する。

注 駐車ブレーキにもインタロック･スイッチが搭載されています。駐車ブレーキを掛けたままで走行ペダルが踏まれるとエンジンを停止させます。

緊急時の牽引について

緊急時には、短距離に限り、本機を牽引して移動することができます。ただし、 Toro ではこれを平常時の移動手段としては推奨していません。

重要 牽引移動時の速度は、3～4 km/h としてください。これ以上の速度では走行系統に損傷を与える恐れがあります。長い距離を移動しなければならない場合にはトレーラなどを使用してください。

1. 油圧ポンプについているバイパスバルブ（図 42）を90° 回転させる。

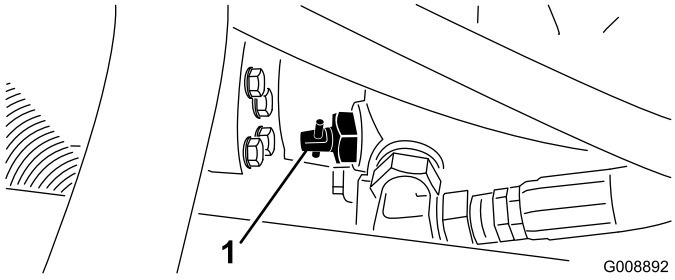


図 42

1. バイパスバルブ

2. エンジンを掛ける時にはバルブを90° （1/4 回転）させて元通りに閉める。バルブを開けたままでエンジンを掛けないこと。

スタンダード･コントロール･モジュール(SCM)

スタンダード・コントロール・モジュールは樹脂によって完全封止された汎用制御モジュールです。電子回路により機械の状態の制御と監視を行い、機械を安全に動作させるために必要な電子制御を実現しています。

モジュールは、入力信号として、ニュートラル状態、駐車ブレーキ、PTO、エンジン始動、バックラップ、オーバーヒートなどの情報を取り込みます。そして、これらの入力情報に対する応答として、PTOスイッチ、スタータスイッチ、ETR（エンジン駆動ソレノイド）を制御します。

モジュール表面は入力表示部と出力表示部に分かれています。入力側の情報も出力側の情報も回路基盤に搭載された緑色の LED で表示されます。

エンジン始動回路のLEDはDC 12Vの通電で点灯します。その他の入力表示回路は回路が閉じてアースされた時に通電状態となります。どの入力表示LEDも、その回路に通電があったときに点灯します。これらの入力表示LEDは故障探究のときに利用することが出来ます。

出力回路はそれぞれ所定の入力がそろった時に通電状態となります。出力回路はPTO、ETR、STARTの 3 種類です。各LEDによりそれぞれの回路のリレー状態すなわちその回路の通電状態がわかります。

出力回路が健全でも、出力装置そのものが健全であることは保証できません。ですから電気系統の故障探究を行う時には、出力LEDのチェック以外に各機器の通常のテストやワイヤハーネスの検査が必要になります。各機器のインピーダンス測定、ワイヤハーネスをつないだ状態（SCMで切り離した状態）でのインピーダンス測定、一時的な通電試験などを行ってみる必要があるでしょう。

SCMは外部のコンピュータや診断機器に接続することはできません。また、内部のプログラムを改変することもできませんし、発生した故障内容を記憶しておくこともできません。

SCM上のLEDの説明は絵文字です。枠で囲まれた 3 つが出力です。それ以外はすべて入力です。以下に記号とその意味を示します。

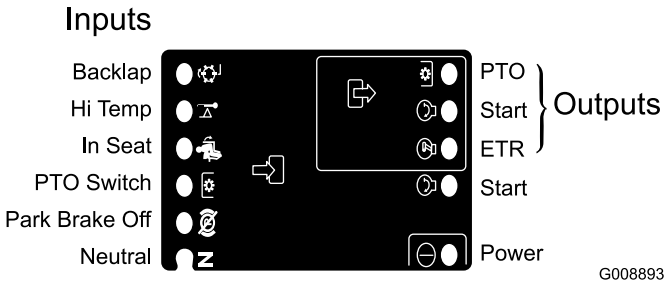


図 43

SCMを使った故障探究手順は以下の通りです。

1. どの出力を調べたいのかを決める（PTO、始動、ETR）。
2. 始動キーをONにして、赤い電源LEDが点灯するのを確認する。

3. 各入力スイッチを操作して、対応する入力LEDの点灯を確認する。
4. スイッチやレバーを操作して、調べたい出力に必要な入力条件を作り出す。入力条件は、次ページのロジック・チャートで調べることができる。
5. 出力LEDが点灯しているのにその機器が作動しない場合には、出力ハーネス、そこから先の接続、機器そのものの故障が疑われる。必要に応じて修理を行なう。
6. 出力側の LED が点灯しない場合は、ヒューズ 2 ヶ所を点検する。
7. 入力が正常なのに出力LEDが点灯しない場合には、SCM を交換して症状が解消するかを試験する。

チャートの各行（横列）は、その出力機能に必要な入力の状態を示します。チャートの左欄に、機能が示されています。各記号は以下のような意味を表します： 通電、閉じてアースされている、開いてアースされている。

入力									出力		
機能	パワー On	ニュートラル	始動 On	ブレーキが ON	PTO ON	着席	オーバーヒート	バックラップ	始動	ETR	PTO
始動	−	−	+	O	O	−	O	O	+	+	O
運転（非着席）	−	−	O	O	O	O	O	O	O	+	O
運転（着席）	−	O	O	−	O	−	O	O	O	+	O
刈り込み	−	O	O	−	−	−	O	O	O	+	+
バックラップ	−	−	O	O	−	O	O	−	O	+	+
オーバーヒート	−		O				−		O	O	O

- (-)： 回路が閉じてアースされている（LED ON）。
- (O)： 回路が開いてアースされているか非通電状態 （LED OFF）
- +： 回路は通電している（クラッチ・コイル、ソレノイド、始動キー） LED点灯
- 空白： そのロジックに無関係な入力

故障探究手順は、まず、始動キーをON にする（エンジンは始動しない）。不具合の出ている機能を表の一番左の欄から探し出す。必要な入力をそれぞれ操作してLED が点灯するのを確認する。

入力LED に問題がなければ出力LED を確認する。出力LED が点灯しているのにその機器が作動しない場合には、機器に到達している電圧、機器までの導通、アース回路などを検査する。発見した故障内容に応じて修理を行う。

ヒント

一般的なヒントModel 03171 用

⚠ 危険

この芝刈機は斜面での走行性能を高めるための特殊な駆動システムを採用しており、通常の3輪芝刈機とは違い、登りの限界角度に達して山側の車輪が浮いてしまっても前進することが可能です。急斜面で無理をしてこれが起こると転倒する危険があり、非常に危険です。

実際に転倒が起きる角度は一定ではありません。芝草の状態や斜面の凹凸の状態、速度（特に旋回中の速度）、カッティングユニットの位置（特にサイドワインダー装着機）、タイヤ空気圧、オペレータの経験など多くの要素が複雑に絡み合って条件が形成されます。

一般に傾斜角度15°以下では転倒の恐れは少ないといわれます。25°程度で転倒の恐れは中程度となります。*この機械は傾斜角度20°以内の斜面で使うようにしてください。これ以上の角度では転倒人身事故の恐れが極めて大きくなります。*

安全に刈り込み作業を行える法面かどうかの判断は、各マシンに付属している傾斜計を使って現場の調査を行って判断してください。このような調査に当たっては、芝草の状態、天候による変化、横転の危険など常識的な判断を十分に生かすように心がけてください。安全に刈り込み作業を行える法面かどうかの判断は、各マシンに付属している傾斜計を使って判断してください。危険度を調べるには、断面 5cm x 10cm 程度の角材を斜面におき、その上に傾斜計を載せてその斜面の角度を測ります。この方法では斜面の平均的な角度を得ることができますが、小さな凹凸は無視されるので実際の運転に当たってはなお十分な注意が必要です。*傾斜が20°を超える場所では本機を使用しないでください。*

また、この機械ではステアリングチューブに傾斜計が取り付けてあります。これで運転中に左右の傾きを確認することができますから、25°以上の斜面には入らないように十分注意してください。

運転時には必ずシートベルトを着用のこと。

- 実際に作業を始める前に、安全な場所で運転操作に十分慣れておいてください。
- まずエンジンを始動し、ハーフスロットルでウォームアップします。エンジンが温まったらフルスロットルにしてください。カッティングユニットを上昇させ、駐車ブレーキを解除し、移動走行モードにセットし、静かに前進ペダルを踏み込んで、安全な広い場所に移動してください。
- まず、前進、後退、停止を練習します。走行ペダルから足を離せば ペダルは自動的にニュートラル位置に戻って停止します。下り坂を走行中に停止する場合は、後退ペダルを利用するほうが効果的でしょう。
- 斜面では十分に速度を落としてハンドリングを安定させてください。斜面を横切って走行する前には、サイドワインダー･カッティングユニットを山側にスライドさせて機体を安定させましょう。谷側にスライドさせると機体が**不安定**になりますから注意してください。この操作は必ず斜面を横切り始める**前に**済ませてください。
- 斜面の刈り込みは、できるだけ上下方向に行ってください。斜面を下るときには、機体を安定させるためにカッティングユニットを下げておいてください。斜面では旋回しないでください。
- 障害物の周囲をカッティングユニットを下げた状態、上げた状態のどちらでも上手に旋回できるように練習してください。狭い場所を通り抜ける時、マシンやカッティングユニットをぶつけて損傷しないよう十分注意してください。
- サイドワインダーを使って左右へのスライドによるリーチの感覚をつかんでください。
- サイドワインダーの操作は、カッティングユニットが上昇位置にある時、または実際に芝刈り走行中以外は行わないでください。カッティングユニットを下げたまま、機体が停止している時にスライド動作を行うと、芝生を損傷します。
- ラフでは低速で走行してください。
- 芝刈り中に周囲に人が現れた場合には直ちにブレードを停止させてください。周囲に人がいる所では絶対に作業をしないでください。この機械は1 人乗りです。人を便乗させないでください。大変危険であり、人身事故の恐れがあります。
- 事故は誰にでも起こります。事故の原因で最も多いのはスピードの出しすぎ、急旋回、地表面の不均一など（安全に刈れる傾斜の限度をきちんと守ること）などがあげられます。またエンジンを掛けたまま運転席を離れたり、薬物を摂取した状態で運転をしたりすることも止めてください。市販の風邪薬や処方箋薬でも眠気を催すことが

ありますから事前に確認しておくことが必要です。常に安全を確認しましょう。無理をすると重大な事故を引き起こします。

- サイドワインダーでは、オーバーハングが最大33 cm にも達しますのでバンカーや池などの障害物から十分に離れた位置からギリギリまで刈り込みを行うことができます。
- また前方に障害物があってもカッティングユニットのスライド動作でかわすことができます。
- 移動走行時にはカッティングユニットを上昇させ、走行モード切り換えレバーを「移動走行」モード（左位置）にし、最大スロットルにセットしてください。

モデル 03170 運転のヒント

⚠ 危険

この芝刈機は斜面での走行性能を高めるための特殊な駆動システムを採用しており、通常の3輪芝刈機とは違い、登りの限界角度に達して山側の車輪が浮いてしまっても前進することが可能です。急斜面で無理をしてこれが起こると転倒する危険があり、非常に危険です。

実際に転倒が起きる角度は一定ではありません。芝草の状態やターフの凹凸の状態、速度（特に旋回中の速度）、カッティングユニットの位置、タイヤ空気圧、オペレータの経験など多くの要素が複雑に絡み合って条件が形成されます。

一般に傾斜角度20°以下では転倒の恐れは少ないといわれます。25°程度で転倒の恐れは中程度となります。*これ以上の角度では転倒人身事故の恐れが極めて大きくなります。この機械は傾斜角度25°以内の斜面でお使いください。*

安全に刈り込み作業を行える法面かどうかの判断は、各マシンに付属している傾斜計を使って現場の調査を行って判断してください。このような調査に当たっては、芝草の状態、天候による変化、横転の危険など常識的な判断を十分に生かすように心がけてください。安全に刈り込み作業を行える法面かどうかの判断は、各マシンに付属している傾斜計を使って判断してください。危険度を調べるには、断面 5cm x 10cm 程度の角材を斜面におき、その上に傾斜計を載せてその斜面の角度を測ります。この方法では斜面の平均的な角度を得ることができますが、小さな凹凸は無視されるので実際の運転に当たってはなお十分な注意が必要です。*傾斜が25°を超える場所では本機を使用しないでください。*

また、この機械ではステアリングチューブに傾斜計が取り付けてあります。これで運転中に左右の傾きを確認することができますから、25°以上の斜面には入らないように十分注意してください。

運転時には必ずシートベルトを着用のこと。

- 実際に作業を始める前に、安全な場所で運転操作に十分慣れておいてください。
- まずエンジンを始動し、ハーフスロットルでウォームアップします。エンジンが温まったらフルスロットルにしてください。カッティングユニットを上昇させ、駐車ブレーキを解除し、移動走行モードにセット

し、静かに前進ペダルを踏み込んで、安全な広い場所に移動してください。

- まず、前進、後退、停止を練習します。走行ペダルから足を離せば ペダルは自動的にニュートラル位置に戻って停止します。下り坂を走行中に停止する場合は、後退ペダルを利用するほうが効果的でしょう。
- 斜面では十分に速度を落としてハンドリングを安定させてください。斜面を横切って走行する前には、サイドワインダー･カッティングユニットを山側にスライドさせて機体を安定させましょう。谷側にスライドさせると機体が**不安定**になりますから注意してください。この操作は必ず斜面を横切り始める**前に**済ませてください。
- 斜面の刈り込みは、できるだけ上下方向に行ってください。斜面を下るときには、機体を安定させるためにカッティングユニットを下げておいてください。斜面では旋回しないでください。
- 障害物の周囲をカッティングユニットを下げた状態、上げた状態のどちらでも上手に旋回できるように練習してください。狭い場所を通り抜ける時、マシンやカッティングユニットをぶつけて損傷しないよう十分注意してください。
- サイドワインダーを使って左右へのスライドによるリーチの感覚をつかんでください。
- サイドワインダーの操作は、カッティングユニットが上昇位置にある時、または実際に芝刈り走行中以外は行わないでください。カッティングユニットを下げたまま、機体が停止している時にスライド動作を行うと、芝生を損傷します。
- ラフでは低速で走行してください。
- 芝刈り中に周囲に人が現れた場合には直ちにブレードを停止させてください。周囲に人がいる所では絶対に作業をしないでください。この機械は1 人乗りです。人を便乗させないでください。大変危険であり、人身事故の恐れがあります。
- 事故は誰にでも起こります。事故の原因で最も多いのはスピードの出しすぎ、急旋回、地表面の不均一など（安全に刈れる傾斜の限度をきちんと守ること）などがあげられます。またエンジンを掛けたまま運転席を離れたり、薬物を摂取した状態で運転をしたりすることも止めてください。市販の風邪薬や処方箋薬でも眠気を催すことがありますから事前に確認しておくことが必要です。常に安全を確認しましょう。無理をすると重大な事故を引き起こします。
- サイドワインダーでは、オーバーハングが最大33 cm にも達しますのでバンカーや池などの障害物から十分に離れた位置からギリギリまで刈り込みを行うことができます。
- また前方に障害物があってもカッティングユニットのスライド動作でかわすことができます。
- 移動走行時にはカッティングユニットを上昇させ、走行モード切り換えレバーを「移動走行」モード（左位置）にし、最大スロットルにセットしてください。

刈り込みのテクニック

- ブレードを回転させてからゆっくりと芝刈り場所に入ります。前のカッティングユニットが芝刈りの境界内に入ったところでカッティングユニットを降下させます。
- 真っ直ぐに刈りたい（きれいなストライプを作りたいときなど）場合は、樹木などを目印にして走行してください。
- 前方のカッティングユニットが芝刈りエリアの境界についたらカッティングユニットを上げます。「雨だれ型」のターンを行うと、早く旋回し、しかもラインを揃えやすくなります。
- サイドワインダー搭載機はバンカー周りや池の周囲の刈り込みを簡単に行うことができます。シフトレバーを右または左に倒せば同じ方向にカッティングユニットがスライドします。タイヤが毎回同じ場所を通らないように刈りたい場合も、この機能が役立ちます。
- 刈りカスは前方または後方に排出されます。。刈り取り量が少なく、見栄えが重要な場合は前に排出します。カッティン グユニットの後シールドを閉じれば、刈りカスは前方向に排出されます。

⚠ 注意

後シールドの開閉は必ずエンジンを止めて行なってください。エンジンを掛けたままで行なうと大けがをしたり、機械を破損させる危険があります。

エンジンを止め、機械の各部がすべて完全に停止したことを確認してからカッティングユニットのシールドに触れてください。

- 刈り取り量が多い場合は、シールドを水平より少し下向 きに開けます。**シールドを開きすぎるとエンジン付近や ラジエター部に**

刈りカスが溜まってオーバーヒートしや すくなりますから注意してください。

- カッティングユニットには、リール・モータと反対側にバランスウェイトがついています。刈り高のミスマッチが起 こる場合にはこのウェイトを増減することができます。

刈り込みがおわったら

芝刈り作業が終わったら、ホースと水道水で洗車をしますが、水圧が高いとシールやベアリングに浸水しますからノズルは使用しないでください。ラジエターおよびオイル・クーラに刈りかすやごみが付着していたらきれいに取り除いてください。洗車が終わったら、各部の磨耗・損傷、油圧機器や可動部の状態などの点検を行ってください。またカッティングユニットの刃の調整と切れ具合を点検し、明朝の仕事にそなえましょう。

重要 洗浄が終わったら、サイドワインダーを左右に数回動かしてください。これにより、ベアリングブロックとクロスチューブに溜まっている水を掃き取ることができます（モデル 03170 のみ）。

クリップ・レートの選択（リール速度の設定）

高品質の安定した刈りを行い、均一な感じの刈り上がりのためには、リール速度が刈り高とマッチしていることが非常に重要です。

重要 リール回転速度が遅すぎるとクリップマーク（刈 り取り模様）がはっきり見えてきます。リール回転速度が速すぎると「ボサッとした」刈り上がりになります。

以下の手順でクリップ・レート（リール速度）の調整を行います：

1. カッティングユニットの設定刈高を確認する。カッティングユニットの刃数（5 枚または 8枚）と、設定されている刈り高を確認し、次頁の表で対応する数字を調べる。刈高に対応する数字を見つければよい

リール回転速度の選択表					
刈高（インチ）		5 枚刃リール		8 枚刃リール	
		5 マイル/時	6 マイル/時	5 マイル/時	6 マイル/時
2-1/2	2.50	3	3	3*	3*
2-3/8	2.38	3	4	3*	3*
2-1/4	2.25	3	4	3*	3*
2-1/8	2.13	3	4	3*	3*
2	2.00	3	4	3*	3*
1-7/8	1.88	4	5	3*	3*
1-3/4	1.75	4	5	3*	3*
1-5/8	1.63	5	6	3*	3*
1-1/2	1.50	5	7	3	4
1-3/8	1.38	5	8	3	4
1-1/4	1.25	6	9	4	4
1-1/8	1.13	8	9*	4	5
1	1.00	9	9*	5	6
7/8	0.88	9*	9*	5	7
3/4	0.75	9*	9*	7	9
5/8	0.63	9*	9*	9	9*
1/2	0.50	9*	9*	9	9*
3/8	0.38	9*	9*	9	9*

* 推奨できない刈り高および速度です。

注 数値が大きいほど速度も大きくなります。

2. リール速度コントロールノブ（図 44）を、ステップ（1）で決めた番号に合わせる。

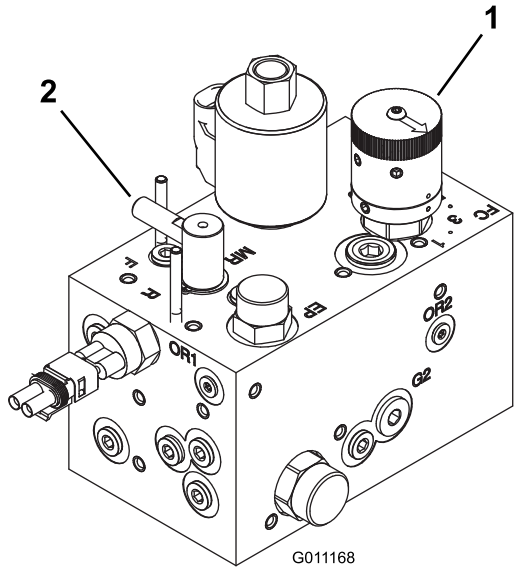


図 44

1. リール速度コントロール　　2. バックラップ・コントロール

3. 上記の設定で数日間作業を行い、芝がその刈り高に馴染んだころに仕上がり具合を再検討する。芝の種類、状態、刈り取り長さ、仕上がりに対する好みなどにより、ノブの設定を 1 目盛り上または下に変更してよい。

保守

注 前後左右は運転位置からみた方向です。

推奨される定期整備作業

整備間隔	整備手順
使用開始後最初の 1 時間	・ ホイールナットのトルク締めを行う。
使用開始後最初の 10 時間	・ ホイールナットのトルク締めを行う。 ・ 全部のベルトの状態と張りを点検します。 ・ 油圧フィルタを交換します。
使用開始後最初の 50 時間	・ オイルとフィルタの交換
使用するごとまたは毎日	・ エンジンオイルの量を点検してください。 ・ 冷却水の量を点検する。 ・ 油圧オイルの量を点検する。 ・ タイヤ空気圧を点検する。 ・ リールとベッドナイフの摺り合わせを点検する。 ・ インタロック･システムを点検します。 ・ 燃料・水セパレータの水抜きを行ないます。 ・ ラジエターとオイル･クーラを清掃してください。 ・ 油圧ラインとホースを点検する。
25運転時間ごと	・ バッテリー液の量を点検する。（格納中は30 日ごとに点検します。）
50運転時間ごと	・ ベアリングとブッシュのグリスアップを行う。（非常にホコリの多い条件で使用しているときには、毎日グリスアップしてください。）
100運転時間ごと	・ 全部のベルトの状態と張りを点検する。
150運転時間ごと	・ オイルとフィルタの交換
200運転時間ごと	・ ホイールナットのトルク締めを行う。 ・ エア・クリーナの整備（悪条件下ではより頻繁に整備を行ってください。） ・ 駐車ブレーキの調整状態を点検します。 ・ 油圧フィルタを交換する。
400運転時間ごと	・ 燃料ラインとその接続を点検します。 ・ 燃料フィルタのキャニスタは所定時期に交換してください。 ・ 油圧オイルを交換する。
500運転時間ごと	・ リア･アクスル･ベアリングのグリスアップ
2年ごと	・ 燃料タンクを空にして内部を清掃します。 ・ 冷却系統の内部洗浄を行う(トロ正規代理店に依頼するか、サービスマニュアルを参照する)。

⚠ 注意

始動キーをつけたままにしておくと、誰でもいつでもエンジンを始動させることができ、危険である。

整備・調整作業の前には必ずエンジンを停止し、キーを抜いておくこと。

始業点検表

このページをコピーして使ってください。

点検項目	第 週						
	月	火	水	木	金	土	日
インタロックの動作							
ブレーキの動作を確認する。							
燃料残量							
エンジンオイルの量を点検する。							
冷却系統を点検							
燃料・水セパレータの水抜き。							
エア･フィルタ、ダスト･カップ、バルブを点検。							
エンジンから異常音がないか点検する。[2]							
ラジエターとスクリーンの汚れ							
運転操作時の異常音							
油圧オイルの量を点検する。							
油圧ホースの磨耗損傷を点検。							
オイル漏れなど。							
燃料残量を点検する。							
タイヤ空気圧を点検する							
計器類の動作							
リールとベッドナイフの刃合わせ							
刈高の調整の点検							
グリスアップを行なう。[2]							
塗装傷のタッチアップを行う。							

[1]始動困難、大量の煙、咳き込むような走りなどが見られる場合はグロープラグと噴射ノズルを点検する。

[2]車体を水洗いしたときは**整備間隔に関係なく直ちに**グリスアップする。

重要 エンジンの整備に関する詳細はエンジンの*オペレーターズマニュアル*を参照してください。

要注意個所の記録

点検担当者名:		
内容	**日付**	**記事**

定期整備ステッカー

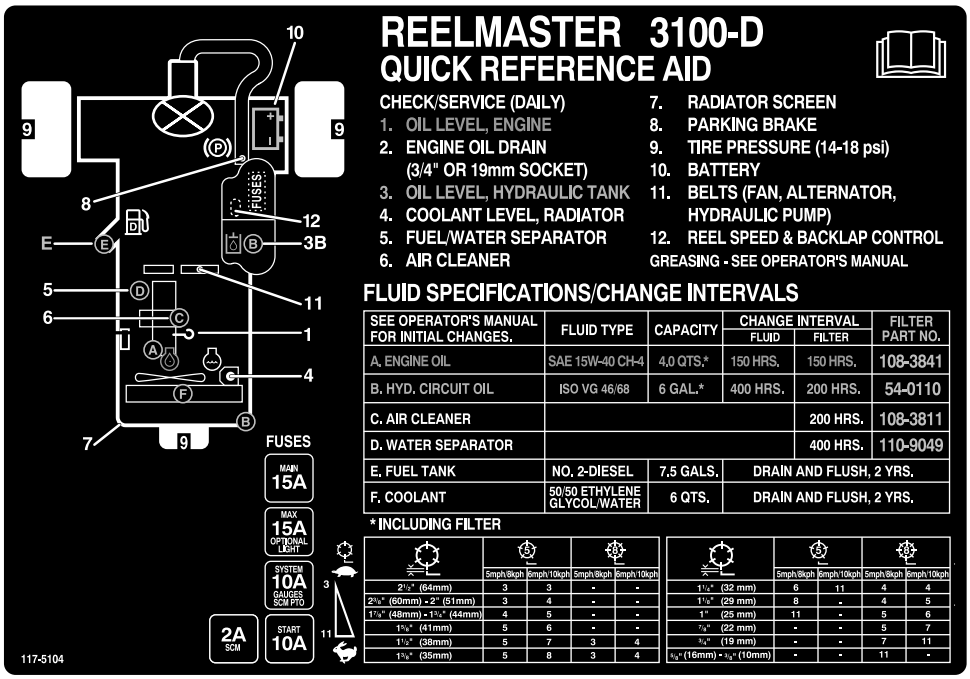


図 45

整備前に行う作業

フードの外しかた

整備をやりやすくするため、フードは簡単に取り外すことができます。

1. ラッチを外してフードを開ける。
2. フードのピボット部をブラケットに固定しているコッター・ピンを抜き取る（図 46）。

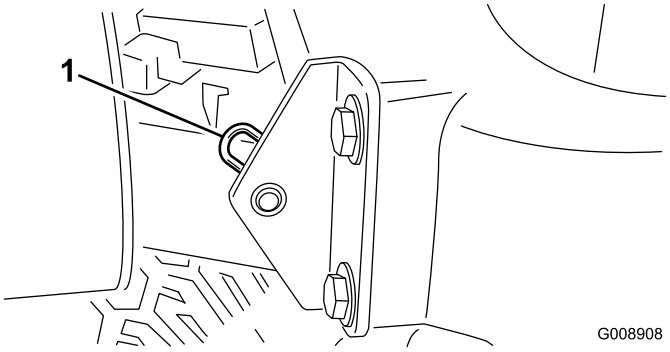


図 46

1. コッター・ピン

3. フードを右側にスライドさせながら反対側を持ち上げると外れる。

注 取り付けは上記と逆の手順で行う。

潤滑

ベアリングとブッシュのグリスアップ

整備間隔: 50運転時間ごと （非常にホコリの多い条件で使用しているときには、毎日グリスアップしてください。）

500運転時間ごと/1年ごと （いずれか早く到達した方）

定期的に、全部のベアリングとブッシュにNo.2汎用リチウム系グリスを注入します。悪条件下（ホコリの多い環境）では毎回グリスアップしてください。ベアリングやブッシュの内部に異物が入ると急激に磨耗が進行します。車体を水洗いしたときは整備間隔に関係なく直ちにグリスアップしてください。

グリスアップ箇所は以下の通りです：

- 後カッティングユニットのピボット（図 47）

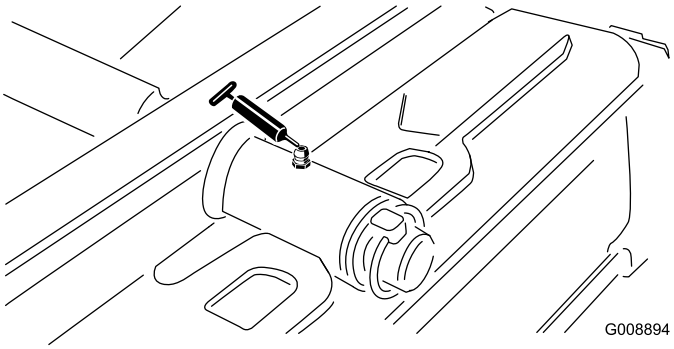


図 47

- 前カッティングユニットのピボット（図 48）

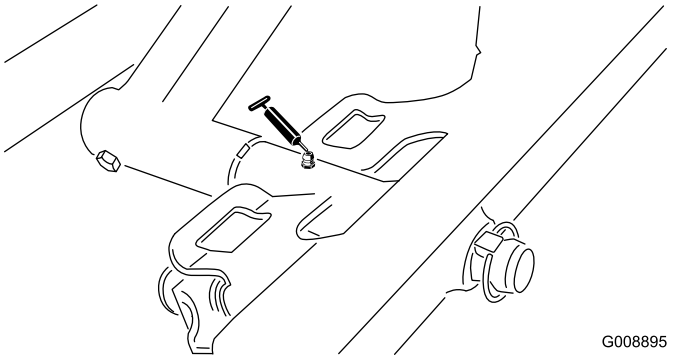


図 48

- サイドワインダーのシリンダの両端（2ヶ所；モデル 03170 のみ）（図 49）

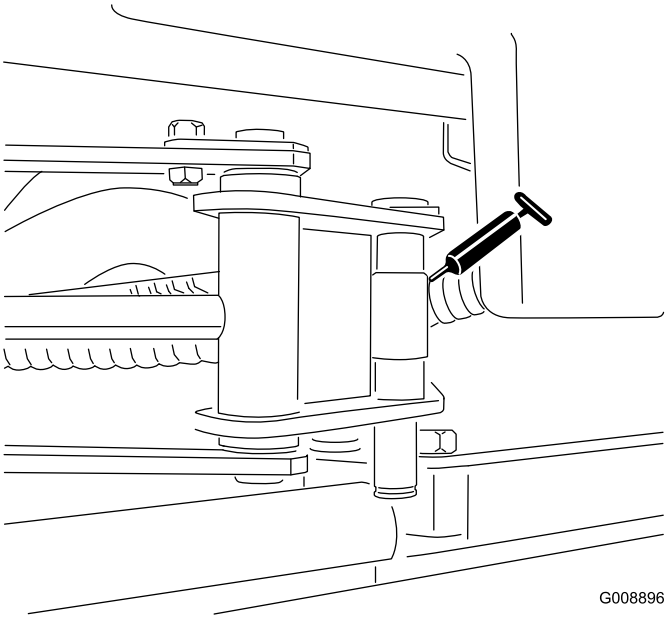


図 49

・ ステアリングピボット（図 50）

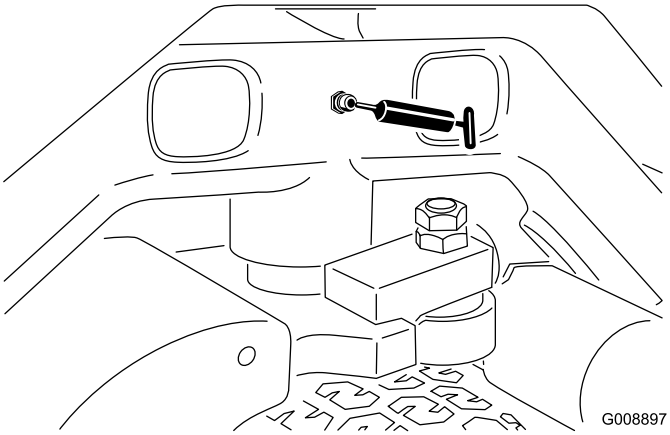


図 50

・ 後昇降アームのピボット昇降シリンダ（2ヶ所）（図 51）

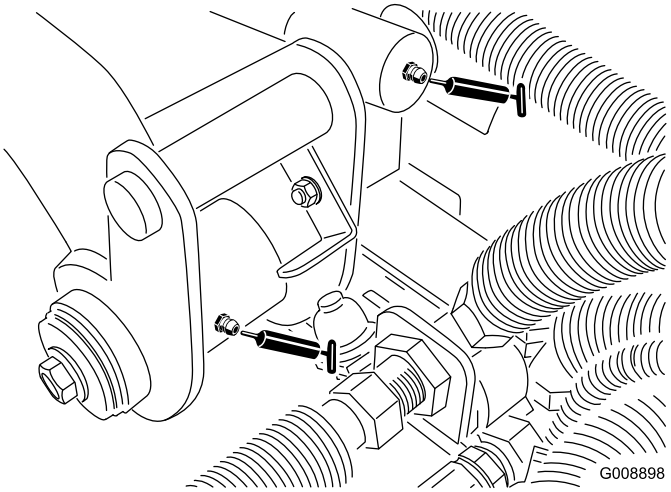


図 51

・ 左前昇降アームのピボット昇降シリンダ（2ヶ所）（図 52）

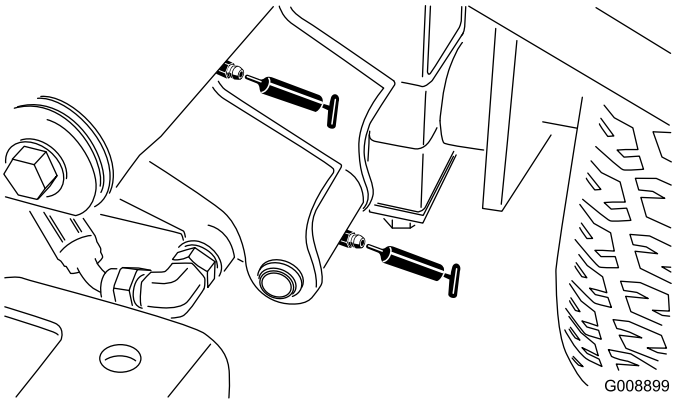


図 52

・ 右前昇降アームのピボット昇降シリンダ（2ヶ所）（図 53）

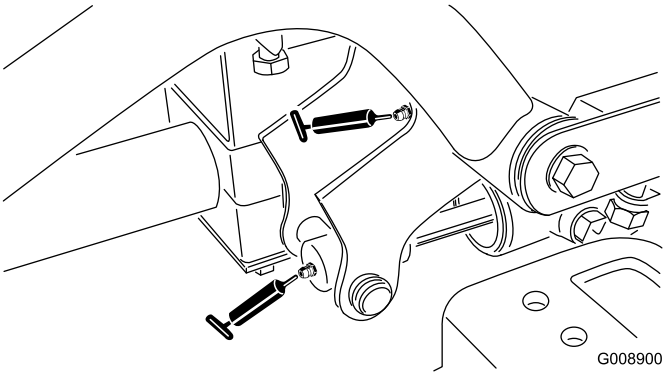


図 53

・ ニュートラル調整機構（図 54）

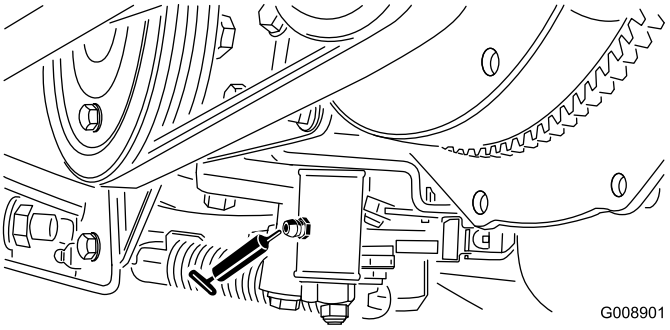


図 54

・ 刈り込み・移動走行切り換えレバー(図 55)

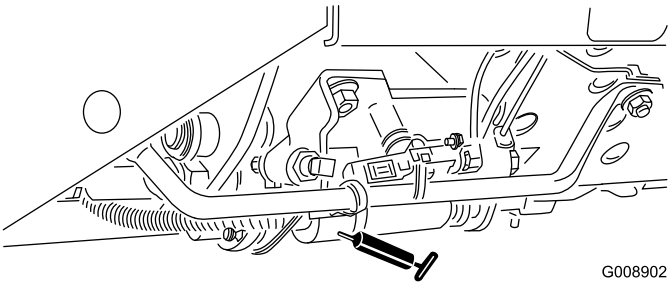


図 55

・ ベルトテンションピボット（図 56）

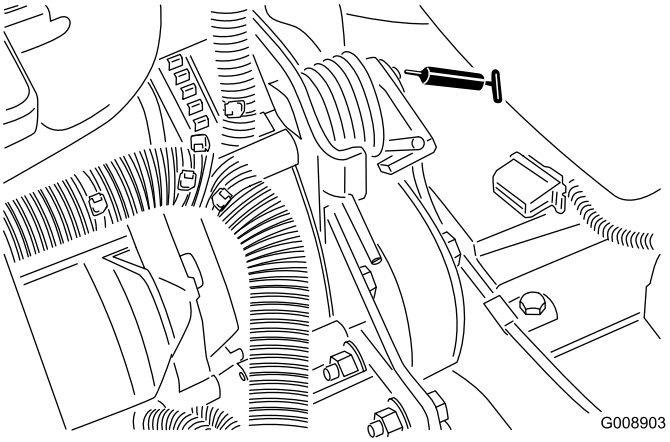


図 56

・ ステアリング･シリンダ（図 57）

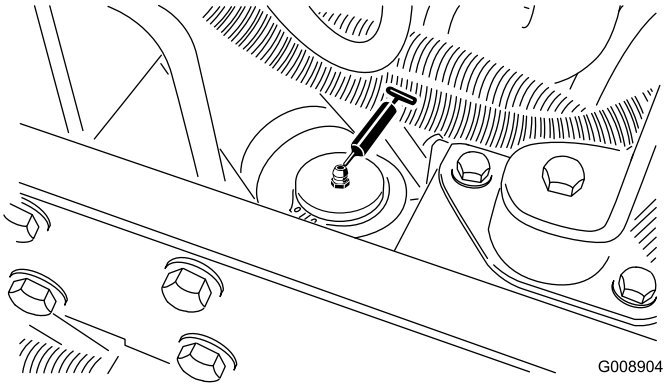


図 57

注 ステアリングシリンダ反対側の端にグリス注入箇所を作ることができます。その場合、タイヤを外し、ニップルを付け、グリスを注入し、ニップルを外し、プラグを取り付けます（図 58）。

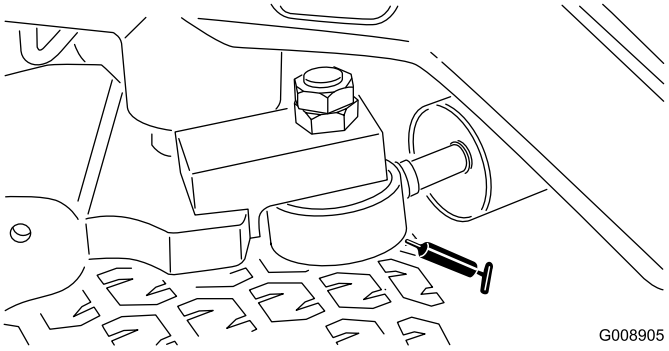


図 58

シールド･ベアリング

ベアリングが、材質上の欠陥や製造上の瑕疵のために破損することはめったにありません。ベアリングが破損する原因で最も多いのは水分などの異物がシールを抜けてベアリング内部に侵入して内部を破損させるものです。グリスパックされているベアリングでは、定期的にグリスを注入して内部の異物を外に押し出してやる必要があります。**密封式の**ベアリングは、製造時に特殊なグリスを封入し、強力なシールによって内部を保護しています。

密封式のベアリングは、短期的には何の整備も必要ないので保守作業が軽減され、また、グリスが落ちてターフを汚すというような事故がありません。そのため、整備の手間が省け、またグリスで芝を汚すようなリスクもありません。通常の使用では性能に問題がでることはまずありませんが、万一の不具合を早期に発見し対処することが重要ですから、定期的な点検はしていただくようにお願いします。1 シーズン

に 1 回は点検を行い、破損を発見した場合や磨耗が進んでいる場合には交換してください。回転がスムーズなこと、作動中に熱を持たないこと、異音がしないこと、ガタや腐食（錆）がないことが大切です。

ベアリングは消耗部品です。また、使用環境から様々なストレス（砂、農薬、水、衝撃など）を受けますから、 整備の良し悪しによって寿命が大きく変わります。整備不良によるベアリングの破損事故は保証の対象にはなりません。

注 ベアリングの寿命は、洗浄手順により長くも短くもなります。機械各部が高温のときに水をかけないこと、また、高圧の水をベアリングに直接当てないことが非常に重要です。

エンジンの整備

エア･クリーナの整備

整備間隔： 200運転時間ごと （悪条件下ではより頻繁に整備を行ってください。）

- エア･クリーナ本体にリーク原因となる傷がないか点検してください。破損していれば交換してください。吸気部全体について、リーク、破損、ホースのゆるみなどを点検してください。
- 推奨整備間隔にて定期整備を行ってください。非常にホコリの多い場所で使用していてエンジンの能力の低下が認められる場合には、整備間隔を短くしてください。早めに整備を行っても意味がありません。むしろフィルタを外したときにエンジン内部に異物を入れてしまう危険が大きくなります。
- 本体とカバーがシールでしっかり密着しているのを確認してください。

1. エア・クリーナのカバーをボディーに固定しているラッチを外す(図 59)。

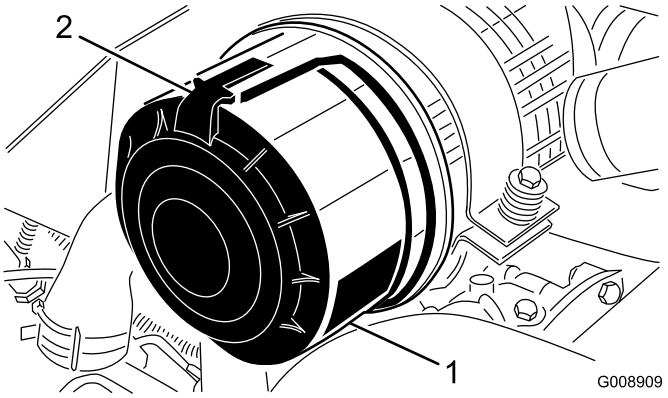


図 59

1. エア･クリーナのカバー　　2. エアクリーナのラッチ

2. ボディーからカバーを外す。
3. フィルタを外す前に、低圧のエア（2.8 kg/cm2、異物を含まない乾燥した空気）で、1次フィルタとボディーとの間に溜まっている大きなゴミを取り除く。高圧のエアは使用しないこと。異物がフィルタを通ってエンジン部へ吹き込まれる恐れがある。このエア洗浄により、フィルタを外した時にホコリが舞い上がってエンジン部へ入り込むのを防止することができる。
4. 1次フィルタ（図 60）を取り外して交換する。

注 エレメントを再使用するつもりで洗うとフィルタの濾紙を破損させる恐れがある。

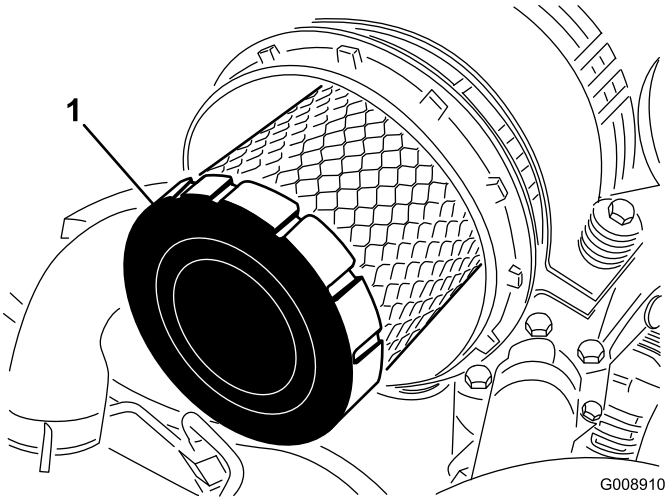


図 60

1. 1次フィルタ

5. 新しいフィルタに傷がついていないかを点検する。特にフィルタとボディーの密着部に注意する。**破損しているフィルタは使用しない。**
6. フィルタをボディー内部にしっかり取り付ける。エレメントの外側のリムをしっかり押さえて確実にボ ディーに密着させる。**フィルタの真ん中の柔らかい部分を持たないこと。**
7. カバーについている異物逃がしポートを清掃する。
8. カバーについているゴム製のアウトレット・バルブを外し、内部を清掃して元通りに取り付ける。
9. アウトレット・バルブが下向き（後ろから見たとき、時計の 5:00 と 7:00 の間になるように）カバーを取り付ける。
10. カバーのラッチをしっかりと掛ける。

エンジンオイルとフィルタの交換

整備間隔: 使用開始後最初の 50 時間

150運転時間ごと

1. ドレン・プラグのどちらか一方（図 61）を外してオイルを容器に受け、オイルの流出がおわったらプラグを元通りに取り付ける。

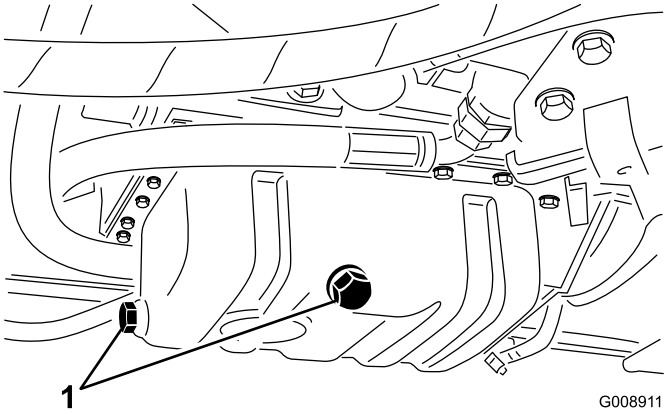


図 61

1. エンジン・オイルのドレン・プラグ

2. オイルフィルタ（図 62）を外す。

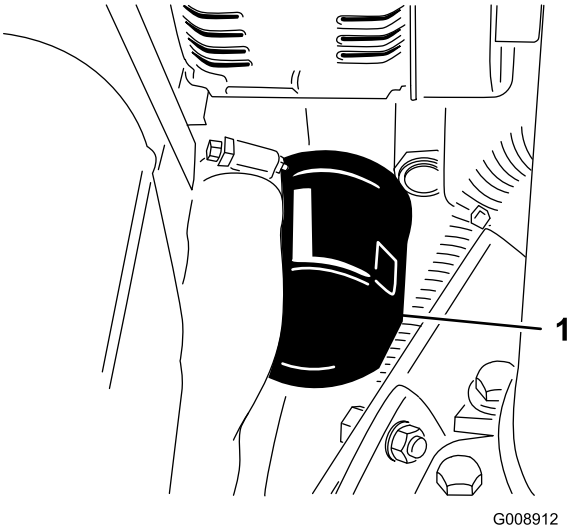


図 62

1. エンジン・オイルのフィルタ

3. 新しいフィルタのシールにきれいなエンジン・オイルを薄く塗り、取り付ける。**締め付けすぎないこと。**
4. エンジン・オイルを入れる。「エンジン・オイルを点検する」の章を参照。

燃料系統の整備

⚠ 危険

軽油は条件次第で簡単に引火･爆発する。発火したり爆発したりすると、やけどや火災などを引き起こす。

- **燃料補給は必ず屋外で、エンジンが冷えた状態で行う。こぼれた燃料はふき取る。**
- **燃料タンク一杯に入れないこと。給油は燃料タンクの首の根元から25㎜ 程度下までとする。これは、温度が上昇して燃料が膨張したときにあふれないように空間を確保するためである。**
- **燃料取り扱い中は禁煙を厳守し、火花や炎を絶対に近づけない。**
- **燃料は安全で汚れのない認可された容器で保存し、容器には必ずキャップをはめる。**

燃料タンクの整備

整備間隔: 2年ごと–燃料タンクを空にして内部を清掃します。

燃料系統が汚染された時や、マシンを長期にわたって格納する場合も同様です。タンクの清掃にはきれいな燃料を使用してください。

燃料ラインとその接続の点検

整備間隔: 400運転時間ごと/1年ごと （いずれか早く到達した方）

燃料ラインの劣化・破損状況やゆるみが出ていないか点検を行ってください。

燃料･水セパレータの水抜き

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

1. 燃料フィルタの下に汚れのない容器をおく。
2. フィルタ容器（図 63）下部のドレンプラグをゆるめて水や異物を流し出す。

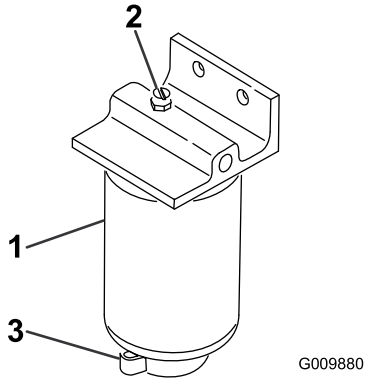


図 63

1. 燃料フィルタ水セパレータのキャニスタ
2. エア抜きプラグ
3. ドレンバルブ

3. 排出が終了したらプラグを締める。

燃料フィルタのキャニスタの交換

整備間隔: 400運転時間ごと

1. フィルタ容器(図 63)の周辺をウェスできれいにぬぐう。
2. フィルタ容器を外して取り付け部をきれいに拭く。
3. ガスケットに薄くオイルを塗る。
4. ガスケットが取り付け部に当るまで手でねじ込み、そこからさらに1/2回転締め付ける。

インジェクタからのエア抜き

注 通常のエア抜きを行ってもエンジンが始動できない場合に行います。通常のエア抜き手順については「燃料系統からのエア抜き」 を参照してください。

1. 燃料噴射ポンプの No.1インジェクタノズルへのパイプ接続部をゆるめる。

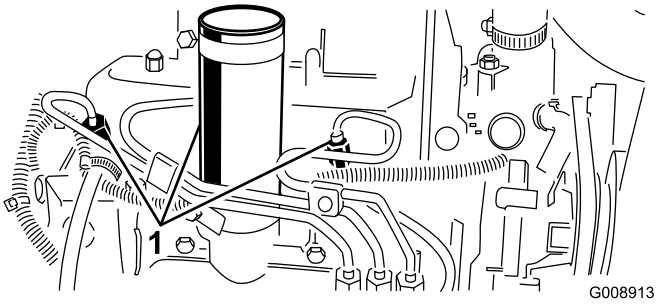


図 64

1. 燃料インジェクタ

2. スロットルをFAST位置とする。

3. 始動キーをSTART位置に回し、接続部から流れ出る燃料を観察する。燃料が泡立たなくなったら、キーを OFF に戻す。
4. パイプをしっかり締め付ける。
5. 残りのノズルからも同じ要領でエアを抜く。

電気系統の整備

バッテリーの手入れ

整備間隔： 25運転時間ごと–バッテリー液の量を点検する。（格納中は30 日ごとに点検します。）

警告

カリフォルニア州
第65号決議による警告

バッテリーの電極部や端子などの部分には鉛や鉛含有物質が含まれており、カリフォルニア州では、これらの物質が癌や先天性異常の原因となるとされている。
取り扱い後は手を洗うこと。

バッテリーの電解液は常に正しいレベルに維持し､バッテリー上部を常にきれいにしておいてください。高温環境下で保管すると､涼しい場所で保管した場合に比べてバッテリーは早く放電します。

⚠ 危険

電解液には触れると火傷を起こす劇薬である硫酸が含まれている。

- **電解液を飲まないこと。また、電解液を皮膚や目や衣服に付けないよう十分注意すること。安全ゴーグルとゴム手袋で目と手を保護すること。**
- **皮膚に付いた場合にすぐに洗浄できるよう、必ず十分な量の真水を用意しておくこと。**
- **充電中はガスが発生するので、通気のよい場所で充電すること。**
- **このガスは引火すると爆発するので、バッテリーには裸火や電気スパークを近づけてはならない； また、作業中の喫煙は厳禁である。**
- **ガスを吸い込むと吐き気を催す場合があるので注意する。**
- **バッテリーチャージャとバッテリーとの接続・切り離しは、充電器のプラグを抜いて行うこと。**

各セルへは、蒸留水またはミネラルを含まない水を適正レベルまで補給してください。但し、電解液の量が、各セルの内側についているスプリットリングの高さ以上にならないよう、注意してください。キャップは換気穴を後ろ（燃料タンク側）に向けて取り付けます。

バッテリー上部はアンモニア水または重曹水に浸したブラシで定期的に清掃してください。清掃後は表面を水で流して下さい。清掃中はセルキャップを外さないでください。

バッテリーのケーブルは、接触不良にならぬよう、端子にしっかりと固定してください。

⚠ 警告

バッテリーケーブルの接続手順が不適切であるとケーブルがショートを起こして火花が発生する。それによって水素ガスが爆発を起こし人身事故に至る恐れがある。

- **ケーブルを *取り外す時は*、必ずマイナス（黒）ケーブルから取り外し、次にプラス（赤）ケーブルを外す。**
- **ケーブルを *取り付ける時*は、必ずプラス（赤）ケーブルから取り付け、それからマイナス（黒）ケーブルを取り付ける。**

端子が腐食した場合は、ケーブルを外し（マイナス・ケーブルから先に外すこと）、クランプと端子とを別々に磨いてください。磨き終わったらケーブルをバッテリーに接続し（プラス・ケーブルから先に接続すること）、端子にはワセリンを塗布してください。

重要 電気系統の整備作業を行う時には、ショートを防止するため、バッテリー・ケーブルを2本とも外してください；ケーブルはマイナス（－）ケーブルから先に外してください。

バッテリーの保管

本機を30 日以上にわたって使用しない場合は、バッテリーを取り外して充電しておいてください。充電終了後は、機体に取り付けて保存しても、機体から外したままで保存してもよい。機体に取り付けて保存する場合は、ケーブルを外しておいてください。温度が高いとバッテリーは早く放電しますので、涼しい場所を選んで保管してください。バッテリーを凍結させないためには、完全充電しておくことが大切です。完全充電したバッテリー液の比重は 1.265～1.299 になります。

ヒューズ

ヒューズはコントローラ・パネルの下に取り付けてあります。

走行系統の整備

走行ドライブのニュートラル調整

走行ペダルをニュートラル位置にしても本機が動きだすようでしたら、トラクションカムを調整します。

1. 平らな場所に駐車し、エンジンを停止させる。
2. 片方の前輪と後輪を持ち上げ、フレームの下にサポート・ブロックを当てて浮かす。

   注 機体は、必ず前輪と片方の後輪の二輪を浮かせること；両方浮かせないと調整中に機体が動き出す。
3. トラクション調整カムのロックナットをゆるめる（図 65）。

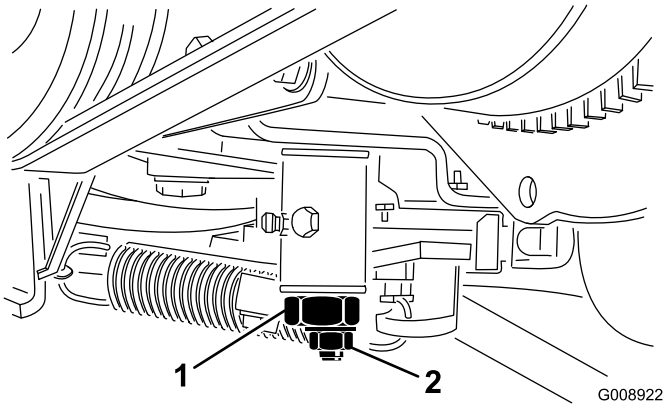


図 65

1. トラクション調整カム　　2. ロックナット

4. エンジンを始動し、カムを左右に回してニュートラル位置の中心に合わせる。
5. ロックナットを締めて調整を固定する。
6. エンジンを止める。
7. 支持ブロックをはずし、機体を床に下ろす。試験運転で調整を確認する。

冷却系統の整備

エンジンの冷却系統の清掃

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

エンジン部、オイルクーラ、ラジエターは毎日清掃してください。汚れが激しければより頻繁な清掃が必要です。

1. エンジンを止め、フードを開ける。
2. エンジンの周囲を丁寧に清掃する。
3. アクセス･パネル（図 66）を取り外す。

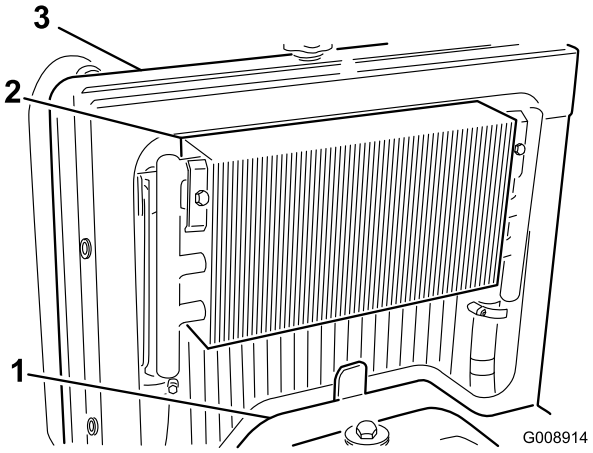


図 66

1. アクセス･パネル
2. オイルクーラ
3. ラジエター

4. オイル･クーラのラッチを外し、クーラーを後ろに傾ける（図 67）。

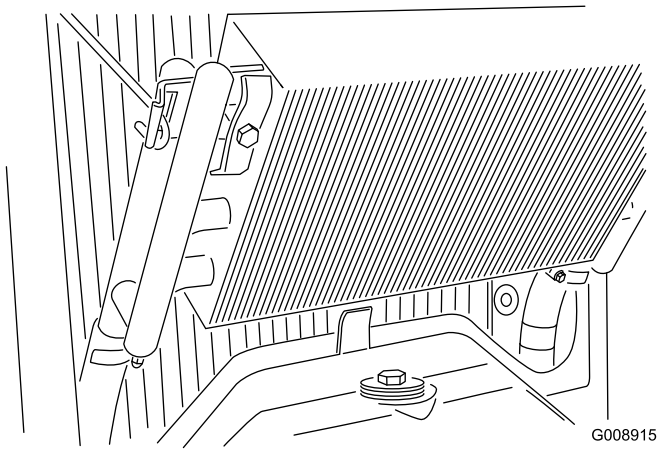


図 67

5. オイル・クーラとラジエターの裏表を水または圧縮空気で丁寧に清掃する。
6. オイルクーラを元に戻し、スクリーンを閉める。
7. アクセスパネルを取り付け、フードを閉めて終了。

ブレーキの整備

駐車ブレーキの調整

整備間隔： 200運転時間ごと–駐車ブレーキの調整状態を点検します。

1. ブレーキ・レバーに調整ノブを固定している固定ネジをゆるめる（図 68）。

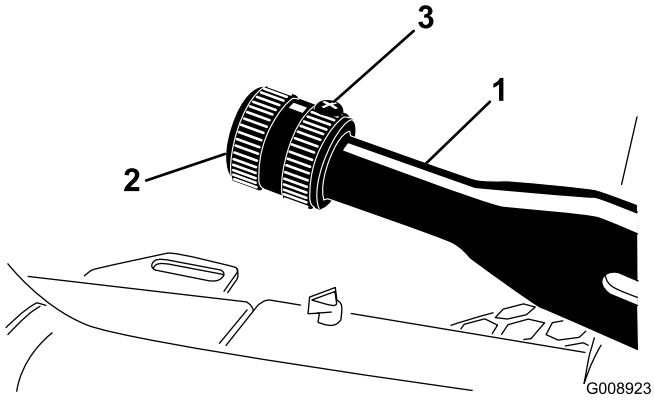


図 68

1. 駐車ブレーキ·レバー
2. ノブ
3. 固定ネジ

2. ブレーキを掛けるのに必要な力が41-68Nm（13.5～18 kg）となるようにノブを回して調整する。
3. ネジを締めて調整を固定する。

ベルトの整備

エンジンベルトの整備

整備間隔： 使用開始後最初の 10 時間–全部のベルトの状態と張りを点検します。

100運転時間ごと–全部のベルトの状態と張りを点検する。

オルタネータ/ファン·ベルトの張り

1. フードを開ける。
2. ベルトのスパンの中央（オルタネータとクランクシャフト・プーリの間）を30Nm（10 kg）の力で押して点検する（図 69）。

   注 ベルトのたわみが10mm 程度あれば適正とする。

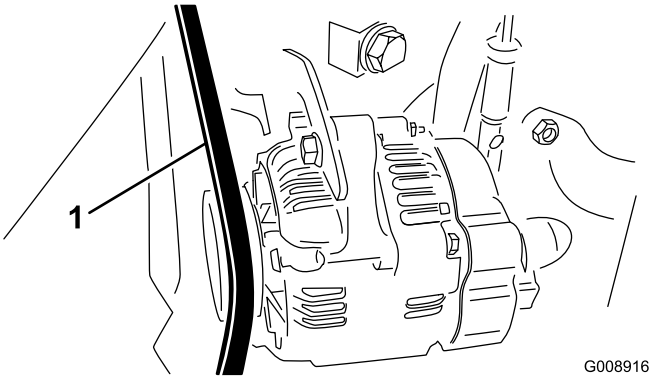


図 69

1. オルタネータ/ファン·ベルト

3. たわみがこの範囲になければ、以下の要領で調整します：
   A. ブレースをエンジンに固定しているボルトと、オルタネータをブレースに固定しているボルトをゆるめる。
   B. オルタネータとエンジンの間にバールを差し込み、オルタネータの位置を変えて必要な張りを出す。
   C. 適切なたわみが出たら、ボルトを締めて調整を固定する。

ハイドロスタットのベルトの交換

1. ベルトのテンション·スプリングの端にナット·ドライバ（または細い金属管）を差し込む。

⚠ 警告

スプリングには大きな張力が掛かっているので十分注意すること。

2. スプリングの端を前側に押し下げてブラケットから外し、スプリングのテンションをなくす（図 70）。

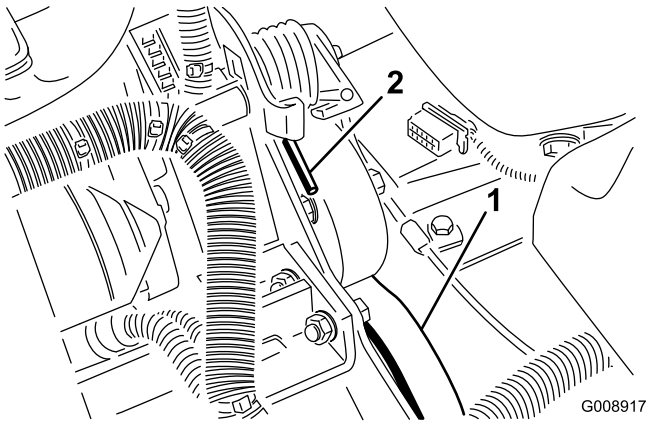


図 70

1. ハイドロスタット駆動ベルト　2. スプリングの端部

3. ベルトを交換する。
4. スプリングの取り付けと張り出しは上記と逆の手順で行う。

制御系統の整備

スロットルの調整

1. スロットル･レバーがパネルのスロットに当たるまで後ろに倒す。
2. 噴射ポンプのレバー･アーム（図 71）の部分にあるスロットル･ケーブルのコネクタをゆるめる。

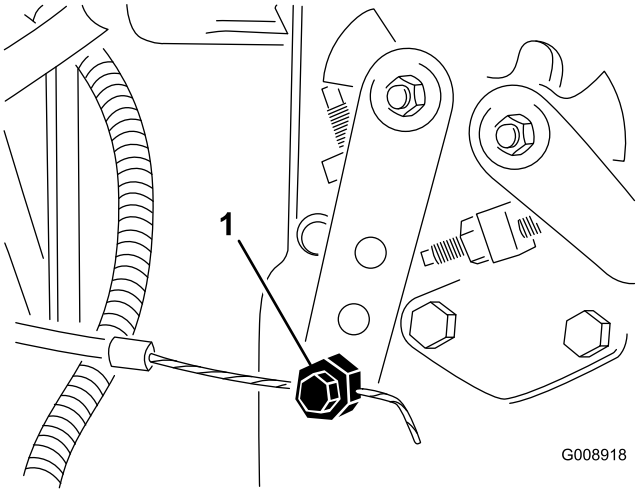


図 71

1. インジェクションポンプのレバーアーム

3. インジェクション･ポンプ･レバーのアームをローアイドル･ストップに当てた状態でケーブル･コネクタを締める。
4. スロットル･コントロールをコントロールパネルに固定しているネジをゆるめる。
5. スロットル･レバーを一番前に倒す。
6. ストッププレートを滑らせてスロットル･レバーに当て、その位置でスロットル･コントロールをパネルに固定する。
7. 運転中にスロットルが動く場合は、スロットル･レバーのロックナットを5～6 Nm（0.5～0.6 kg.m）にトルク締めする。

   注 但しスロットル･レバーは27Nm（9 kg）以内の力で操作できるように調整すること。

油圧系統の整備

油圧オイルの交換

整備間隔： 400運転時間ごと

オイルが汚染されてしまった場合は油圧系統全体を洗浄する必要がありますので、Toro 代理店にご連絡ください。汚染された油圧オイルは乳液状や黒ずんだ色をしています。

1. エンジンを止め、フードを開ける。
2. 油圧ラインの接続部（図 72）または油圧フィルタ（図 73）を外し、流れ出すオイルを容器に受ける。

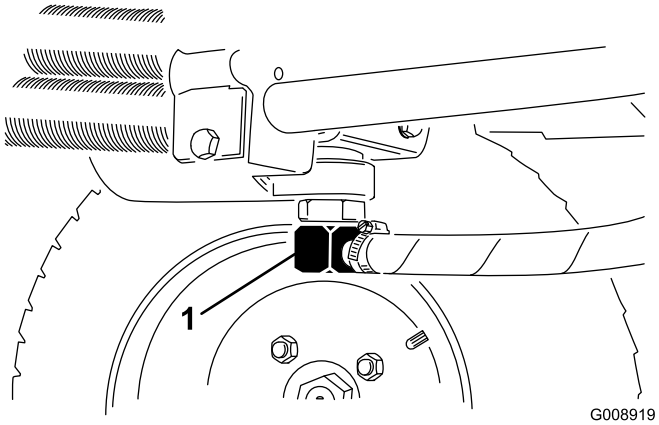


図 72

1. 油圧ライン

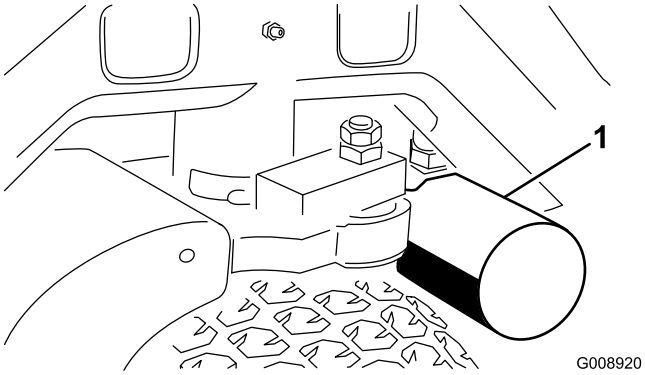


図 73

1. 油圧フィルタ

3. オイルが全部流れ出たらラインを元通りに接続する。
4. タンク（図 74）に油圧オイルを入れる。容量は約 13.2 リットル；油圧系統を点検する」を参照。

   重要 指定された銘柄のオイル以外は使用しないでください。他のオイルを使用すると油圧システムを損傷する恐れがあります。

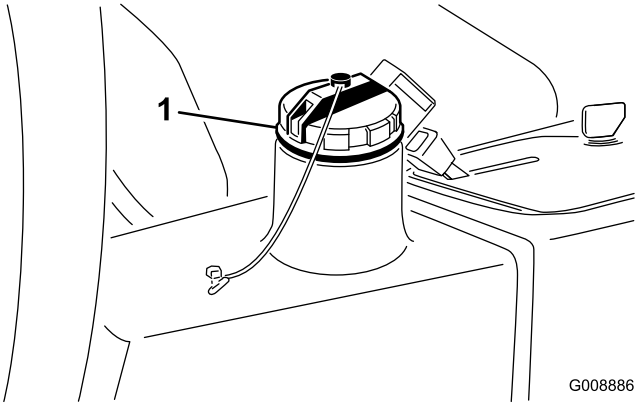


図 74

1. 油圧オイル補給口キャップ

5. タンクにキャップをはめ、エンジンを始動し、全部の油圧装置を操作してシステム内部にオイルを行き渡らせる。
6. また、オイル漏れがないか点検して、エンジンを停止する。
7. 油量を点検し、足りなければディップスティックの FULLマークまで補給する。**入れすぎないこと。**

油圧オイルフィルタの交換

整備間隔： 使用開始後最初の 10 時間

200運転時間ごと/1年ごと （いずれか早く到達した方）

Toro 純正フィルタ（P/N 54-0110）をご使用ください。

重要 純正品以外のフィルタを使用すると関連機器の保証が適用されなくなる場合があります。

1. 平らな場所に駐車し、カッティングユニットを下降させ、エンジンを停止させ、駐車ブレーキを掛けてキーを抜き取る。
2. フィルタ取り付けプレートのホースにクランプを掛ける。
3. フィルタ取り付け部の周辺をウェスできれいにぬぐう。
4. フィルタ（図 73）の下に廃油受けを置いてフィルタを外す。
5. 新しいフィルタのガスケットに薄くオイルを塗布し中にオイルを入れる。
6. フィルタの取り付け部がきれいであることを確認し、ガスケットがフィルタ・ヘッドに当たるまで手で回して取り付け、そこから更に 1/2 回転増し締めする。

7. フィルタ取り付けプレートのホースをの締め付けを外す。
8. エンジンを始動して２分間運転し、システム内のエアをパージする。
9. エンジンを停止させ、オイル漏れがないか点検する。

油圧ラインとホースの点検

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

油圧ライン・油圧ホースにオイル漏れ、ねじれ、支持部のゆるみ、磨耗、フィッティングのゆるみ、風雨や薬品による劣化などがないか点検する。異常を発見したら必ず運転を行う前に修理してください。

⚠ 警告

高圧で噴出する作動油は皮膚を貫通し、身体に重大な損傷を引き起こす。

- **油圧装置を作動させる前に、全部のラインコネクタが適切に接続されていること、およびラインやホースの状態が良好であることを確認すること。**
- **油圧のピンホール・リークやノズルからは作動油が高圧で噴出しているので、絶対に手などを近づけない。**
- **リークの点検には新聞紙やボール紙を使う。**
- **油圧関係の整備を行う時は、内部の圧力を確実に解放する。**
- **万一、油圧オイルが体内に入ったら、直ちに専門医の治療を受けてください。**

その他の保守整備

カッティングユニットのバックラップ

⚠ 危険

動いているリールに触れると重大な人身事故となり最悪の場合死亡する。

- **エンジン回転中は絶対にリールに手や足を触れないこと。**
- **バックラップ中にリールの回転が停止し、また自然に回転を始める場合がある。**
- **回転の止まったリールを手や足で回そうとしないこと**
- **エンジン回転中はリールの調整を行わないこと。**
- **リールが停止してしまった場合は、リールに触れる前にエンジンを停止すること。**

1. 平らな場所に駐車し、カッティングユニットを下降させ、エンジンを停止させ、駐車ブレーキを掛けてキーを抜き取る。
2. コンソールのカバーを外してコントロールの操作ができるようにする。
3. バックラップ･コントロールをバックラップ位置（R）にセットする。リール速度ノブは「１」に合わせる。図 75 を参照のこと。

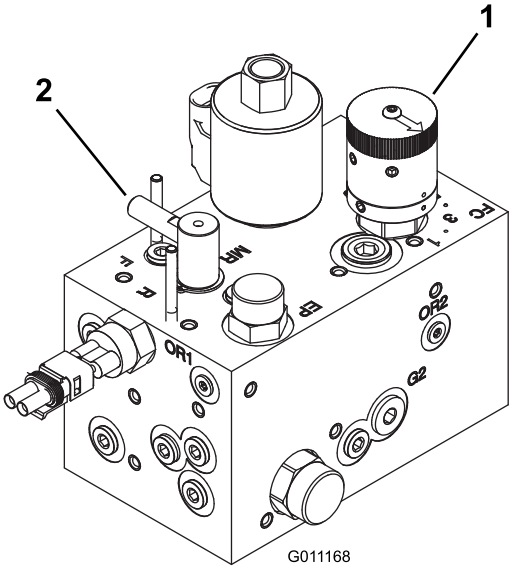


図 75

1. リール速度コントロール　　2. バックラップ･コントロール

注 バックラップモードではシート・スイッチがバイパ スされます。これにより、着席していなくてもエンジンが掛かるよう になりますが、駐車ブレーキが掛かっていることが必要です。

重要 「刈り込み」モードから「バックラップ」モードへの切り換えは、必ずエンジン停止中に行ってください。エンジン回転中に切り換えるとリールを破損させる恐れがあります

4. 全部のカッティングユニットを、バックラップ用に調整する。エンジンを始動し、ロー・アイドルにセットする。
5. リール回転スイッチを「回転」側に倒してリールを 回転させる。
6. 長い柄のブラシを使ってラッピング･コンパウンドを塗布しながらラッピングを続ける。
7. バックラップ中にカッティングユニットの調整を行う時は、必ずリールを停止させ、エンジンを切る。調整が終ったら上記4～6の手順を行う。
8. バックラップが終了したら、エンジンを停止させ、バックラップ・ノブを「芝刈り位置」（F）に戻し、リール速度を通常の芝刈り速度に戻し、カッティングユニットに付着しているラッピング・コンパウンドを完全に洗い落とす。

注 さらに詳しい説明が、「Toro リール/ロータリー･モアのための研磨マニュアル（Form No. 80-300 SL）」に掲載されています。

注 バックラップが終わったら、ベッドナイフの前端に軽くヤスリ掛けを行うとさらに切れ味が向上します。これによりベッドナイフ前端に形成されたバリを取り除きます。このとき刃先を削らないように注意してください。

保管

冬期格納保管のための準備

本機を30日間以上にわたって格納保管する場合には、以下の作業を行ってください。

トラクションユニット

1. トラクションユニット、カッティングユニット、エンジンをていねいに洗浄する。
2. タイヤ空気圧を点検する全部のタイヤに空気を入れる（タイヤ空気圧：（97～110 kPa=1.0 ～ 1.3 kg/cm2）。
3. ボルトナット類にゆるみながいか点検し、必要な締め付けを行う。
4. グリス注入部やピボット部全部をグリスアップする。余分のグリスやオイルはふき取る。
5. 塗装のはがれている部分に軽く磨きをかけ、タッチアップする。金属部の変形を修理する。
6. バッテリーとケーブルに以下の作業を行う：
   A. バッテリー端子からケーブルを外す。
   B. バッテリーを取り出す。
   C. 電極板の劣化を防止するため、バッテリーの保管開始前およびその後は60日ごとに24時間かけてゆっくりと充電する。

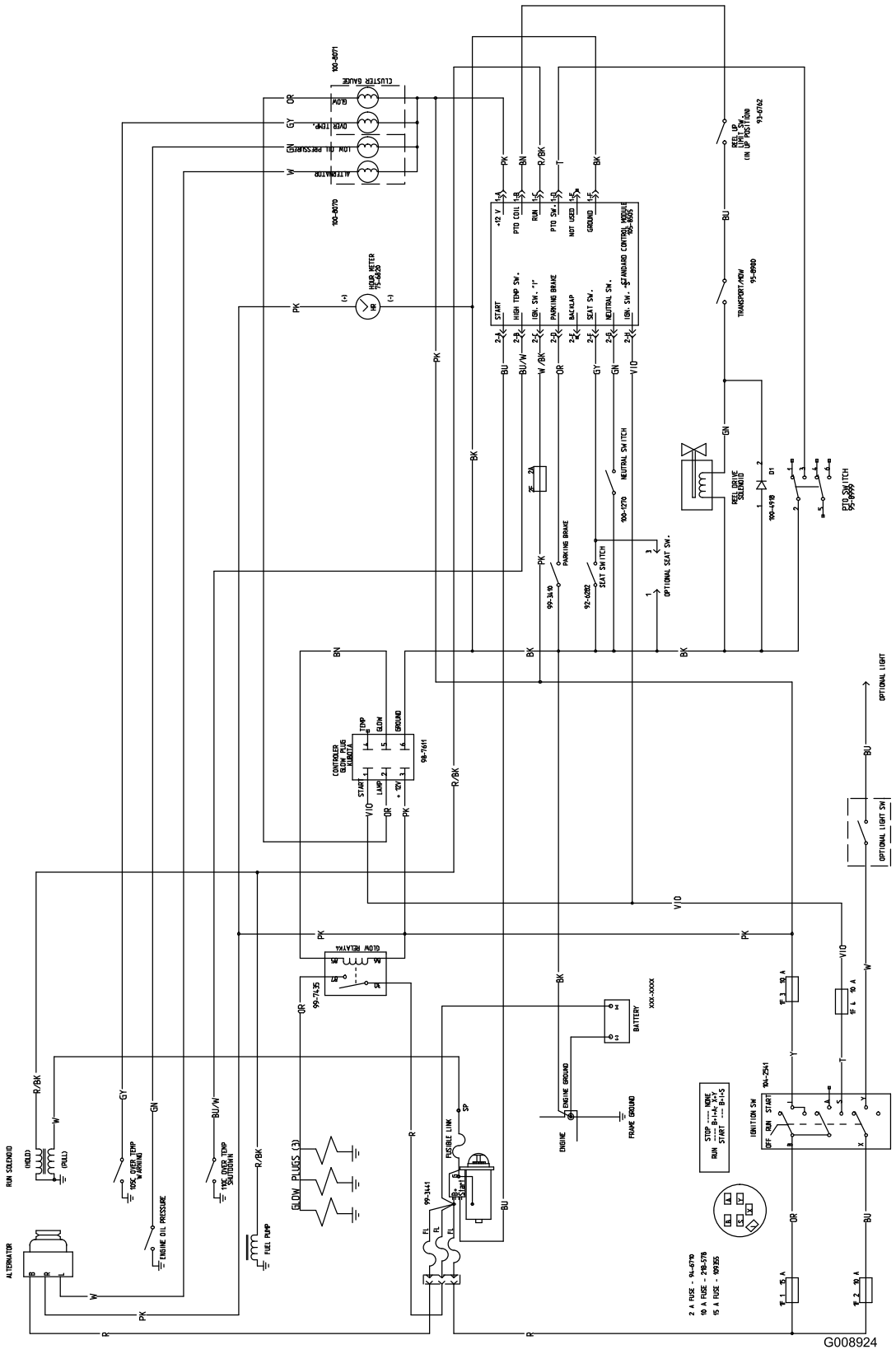
      注 バッテリーを凍結させないためには、完全充電しておくことが大切です。この時、電解液の比重は 1.265～1.299になる。
   D. バッテリー本体、端子、ケーブル端部を重曹水とブラシで洗浄する。
   E. 腐食防止のために両方の端子部にワセリン（Grafo 112X: P/N 505-47）を薄く塗る。
   F. 充電終了後は、機体に取り付けて、または外したまま、涼しい場所で保管する。機体に取り付けて保存する場合は、ケーブルを外しておく。

エンジン

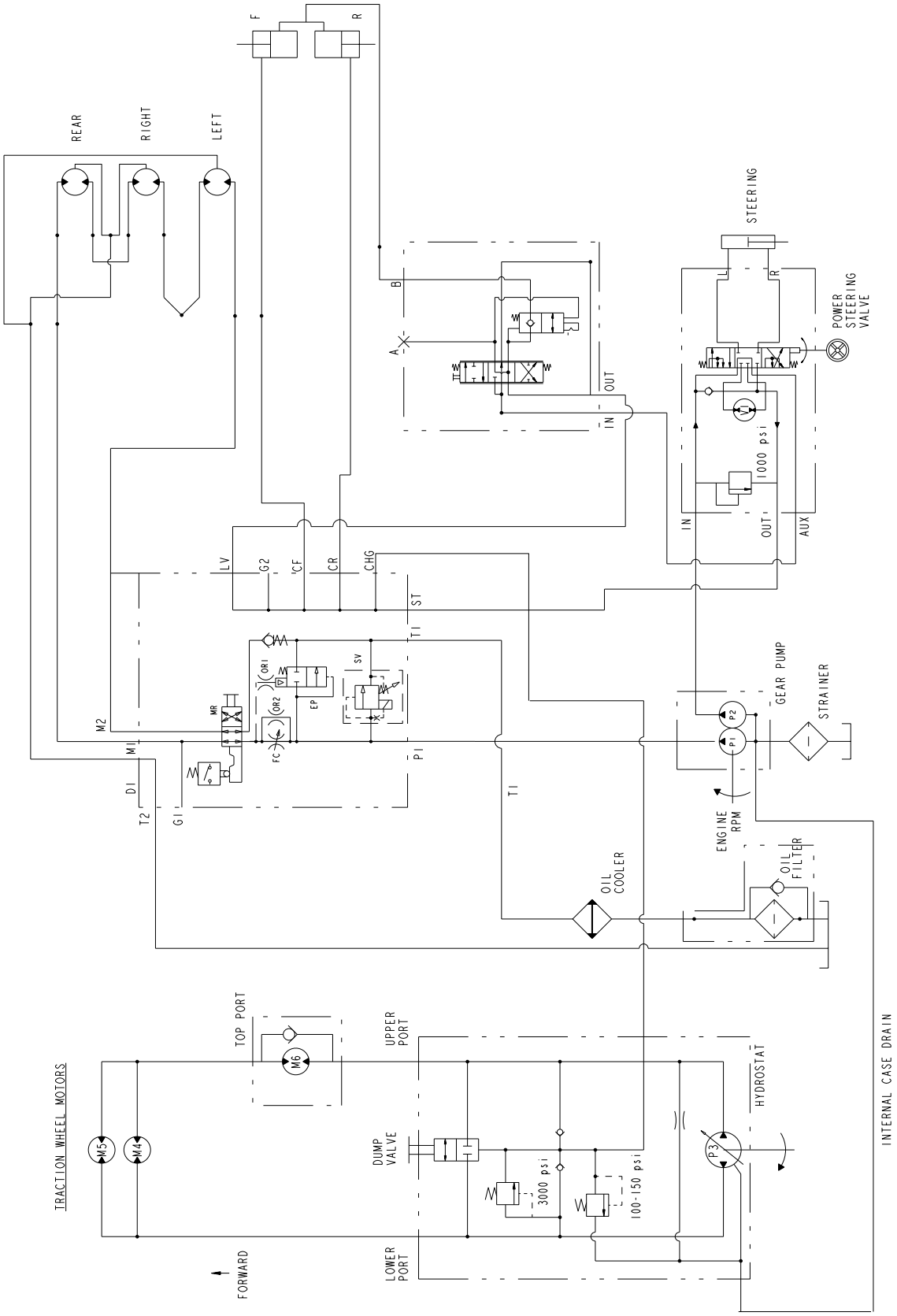
1. エンジン・オイルを抜き取り、ドレン・プラグをはめる。
2. オイルフィルタを外して捨てる。
3. 新しいオイル・フィルタを取り付ける。
4. 新しいエンジンオイル（SAE 15W-40）を約3.8 リットル入れる。
5. エンジンを始動し、約2分間のアイドル運転を行う。

6. エンジンを止める。
7. 燃料タンク（ライン、フィルタ、水セパレータからも）から燃料を完全に抜き取る。
8. 燃料タンクの内部をきれいな燃料で洗浄する。
9. 燃料系統の接続状態を点検し必要な締め付けを行う。
10. エアクリーナをきれいに清掃する。
11. エアクリーナの吸気口とエンジンの排気口を防水テープでふさぐ。
12. 不凍液の量を確認し必要に応じ補給する（保管場所の最低気温を考慮すること）。

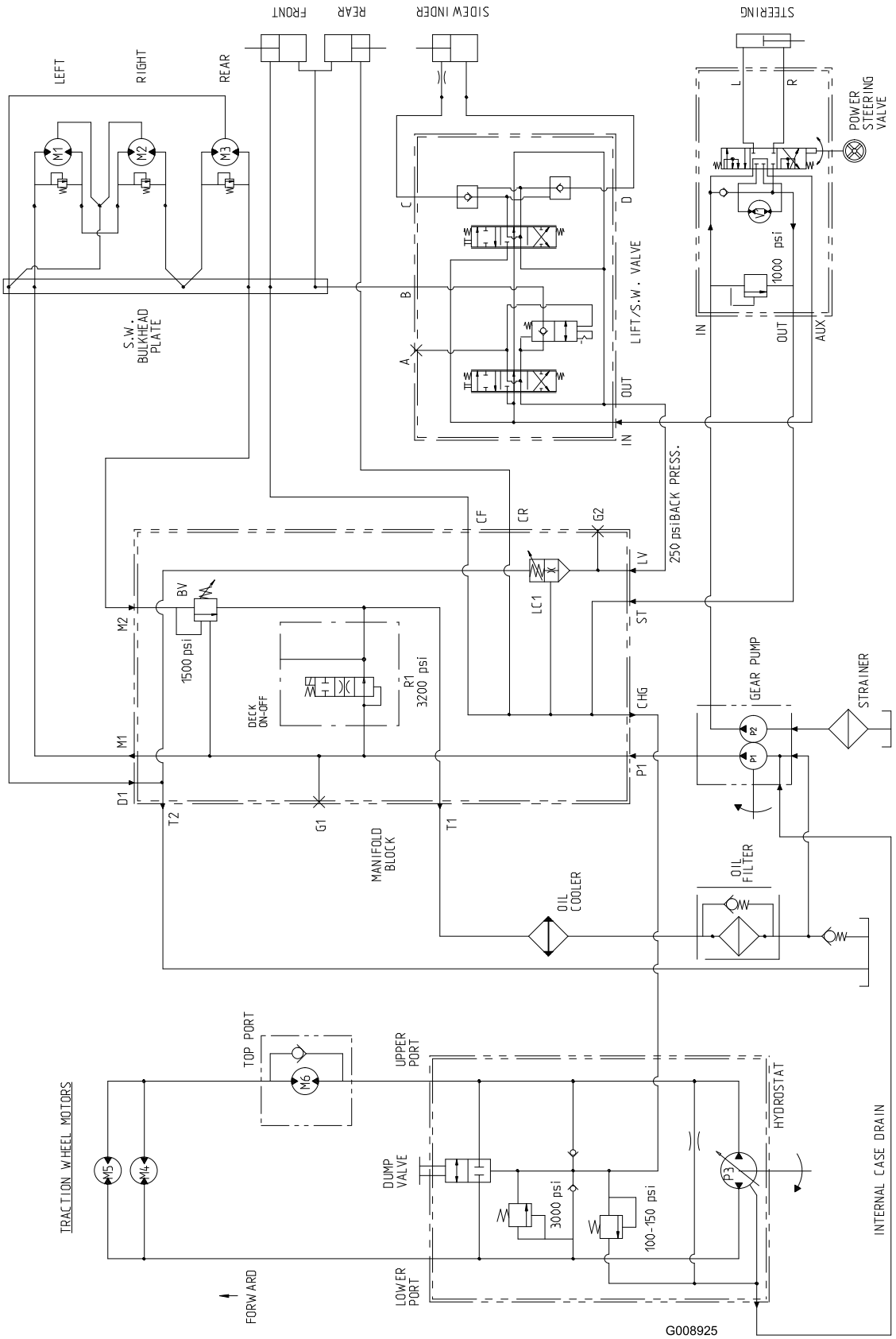
図面



電気回路図 (Rev. A)



油圧回路図（Model 03170）（Rev. A）



油圧回路図（Model 03171）（Rev. A）

メモ：

メモ：

Toro 製品の総合品質保証

限定保証

保証条件および保証製品

Toro® 社およびその関連会社であるToro ワランティー社は、両社の合意に基づき、Toro 社の製品(「製品」と呼びます)の材質上または製造上の欠陥に対して、2年間または1500運転時間*のうちいずれか早く到達した時点までの品質保証を共同で実施いたします。この保証はエアレータを除くすべての製品に適用されます(エアレータに関する保証については該当製品の保証書をご覧下さい)。この品質保証の対象となった場合には、弊社は無料で「製品」の修理を行います。この無償修理には、診断、作業工賃、部品代、運賃が含まれます。保証は「製品」が納品された時点から有効となります。
*アワーメータを装備している機器に対して適用します。

保証請求の手続き

保証修理が必要だと思われた場合には、「製品」を納入した弊社代理店(ディストリビュータ又はディーラー) に対して、お客様から連絡をして頂くことが必要です。連絡先がわからなかったり、保証内容や条件について疑問がある場合には、本社に直接お問い合わせください。

Commercial Products Service Department
Toro Warranty Company
8111 Lyndale Avenue South
Bloomington, MN 55420-1196
E-mail: commercial.warranty@toro.com

オーナーの責任

「製品」のオーナーは、オペレーターズマニュアルに記載された整備や調整を実行する責任があります。これらの保守を怠った場合には、保証が受けられないことがあります。

保証の対象とならない場合

保証期間内であっても、すべての故障や不具合が保証の対象となるわけではありません。以下に挙げるものは、この保証の対象とはなりません:

- Toroの純正交換部品以外の部品や Toro 以外のアクサセリ類を搭載して使用したことが原因で発生した故障や不具合。これらの製品については、別途製品保証が適用される場合があります。
- 推奨される整備や調整を行わなかったことが原因で生じた故障や不具合。*オペレーターズマニュアル* に記載されている弊社の推奨保守手順に従った適切な整備が行われていない場合。
- 運転上の過失、無謀運転など「製品」を著しく過酷な条件で使用したことが原因で生じた故障や不具合。
- 通常の使用に伴って磨耗消耗する部品類。但しその部品に欠陥があった場合には保証の対象となります。通常の使用に伴って磨耗消耗する部品類とは、ブレーキバッドおよびライニング、クラッチライニング、ブレード、リール、ベッドナイフ、タイン、点火プラグ、キャスタホイール、タイヤ、フィルタ、ベルトなどを言い、この他、液剤散布用の部品としてダイヤフラム、ノズル、チェックバルブなどが含まれます。
- 外的な要因によって生じた損害。外的な要因とは、天候、格納条件、汚染、弊社が認めていない冷却液や潤滑剤、添加剤、肥料、水、薬剤の使用などが含まれます。
- 通常の使用にともなう音、振動、磨耗、損耗および劣化。
- 通常の使用に伴う「汚れや傷」とは、運転席のシート、機体の塗装、ステッカー類、窓などに発生する汚れや傷を含みます。

部品

定期整備に必要な部品類(「部品」)は、その部品の交換時期が到来するまで保証されます。この保証によって交換された部品は製品の当初保証期間中、保証の対象となり、取り外された製品は弊社の所有となります。部品やアセンブリを交換するか修理するかの判断は弊社が行います。場合により、弊社は再製造部品による修理を行います。

ディープサイクルバッテリーの保証について:

ディープサイクルバッテリーは、その寿命中に放出することのできるエネルギーの総量(kWh)が決まっています。一方、バッテリーそのものの寿命は、使用方法、充電方法、保守方法により大きく変わります。バッテリーを使用するにつれて、完全充電してから次に完全充電が必要になるまでの使用可能時間は徐々に短くなってゆきます。このような通常の損耗を原因とするバッテリーの交換は、オーナーの責任範囲です。本製品の保証期間中に、上記のような通常損耗によってオーナーの負担によるバッテリー交換の必要性がでてくることは十分に考えられます。

保守整備に掛かる費用はオーナーが負担するものとします

保証の対象とならない部品や作業など: エンジンのチューンナップ、潤滑、洗浄、磨き上げ、フィルタや冷却液の交換、推奨定期整備の実施などは「製品」の維持に必要な作業であり、これらに関わる費用はオーナーが負担します。

その他

上記によって弊社代理店が行う無償修理が本保証のすべてとなります。

両社は、本製品の使用に伴って発生しうる間接的偶発的結果的損害、例えば代替機材に要した費用、故障中の修理関連費用や装置不使用に伴う損失などについて何らの責も負うものではありません。両社の保証責任は上記の交換または修理に限らせていただきます。その他については、排気ガス関係の保証を除き、何らの明示的な保証もお約束するものではありません。

商品性や用途適性についての黙示的内容についての保証も、本保証の有効期間中のみに限って適用されます。米国内では、間接的偶発的損害に対する免責を認めていない州があります。また黙示的な保証内容に対する有効期限の設定を認めていない州があります。従って、上記の内容が当てはまらない場合があります。

この保証により、お客様は一定の法的権利を付与されますが、国または地域によっては、お客様に上記以外の法的権利が存在する場合もあります。

エンジン関係の保証について:

米国においては環境保護局(EPA)やカリフォルニア州法(CARB)で定められたエンジンの排ガス規制および排ガス規制保証があり、これらは本保証とは別個に適用されます。くわしくはエンジンメーカーのマニュアルをご参照ください。上に規定した期限は、排ガス浄化システムの保証には適用されません。くわしくは、*オペレーターズマニュアル* またはエンジンメーカーからの書類に記載されている、エンジンの排ガス浄化システムの保証についての説明をご覧下さい。

米国とカナダ以外のお客様へ

米国またはカナダから輸出された Toro 製品の保証についてのお問い合わせは、お買いあげの Toro 販売代理店(ディストリビュータまたはディーラ)へおたずねください。代理店の保証内容にご満足いただけない場合はToro輸入元にご相談ください。輸入元の対応にご満足頂けない場合はToro ワランティー社へ直接お問い合わせください。